べきか。其の内より何が出で來るとも、凡てを命運にまかせて開く可きか。
若しくは、一も二もなくたゞ之を斥けて、吾は顧みざる可きか。
若しくは、開くと開かざるとは、一に吾が此の内部を考究したる後とす可きか。
吾は人なり。希望ある人なり、責任ある人なり。
此の吾の爲めに何物か出で來る可き。吾を殺す劍か、吾を磨ぐ砥石か、吾を活かす藥品か。吾は活きてあるなり。
其の出で來るものは何にせよ、餘り頓着せずしてたゞ開く可きか。而して余は其の出で來りたるものを滿足して享くべきか。
然り然り。
余は悟れり。余は凡て天に任かせん、神にまかせん。寧ろ平然として之を開き、吾が生涯の一波瀾を求めん。
余は彼の女を愛す。希くばたゞ愛するの心を口にて開かしめよ。然らば出で來るものは自から爾を祝福せん。
然り然り。



箱は謎語を以て封ぜられたり。余は廣濶の心と愛の情とを以て之れを開かん。
其の後は神に在り。　（午後一時半）

---

昨日、田村三治氏よりエマルソン傳（十二文豪の一）送來。今日讀み了はる。

---

嗚呼悠久の天地、紛々の人生、何を求め何を希はん。忽然として逝く此の生命、されど生命なり。
自然よ、自然よ、爾自然よ、吾に告げよ。爾の秘密を。
爾吾を支配す。吾は爾のまゝなり。

---

希望！希望！哀しむ勿れなり。美、吾を救ふ。然り哀しむ勿れ、望を失ふ勿れ。
爾は凡ての最初に於て先づ人間なり。存在なり。天地！何の言葉ぞ。
爾ありて始めて天地あるなり。爾の存在は爾の最初なり。爾に取りて爾の存在は最大の事實ならず。
然り吾は吾にして、同時に自然は自然なり。

無窮無極の吾！　何となれば、天地は無窮なれば也。
されど事實、吾は自然の支配の下に在り。
嗚呼自然よ。希くは吾に語れ、爾の意味を。
爾の汚物なり、爾の力なり、爾の無窮なり。
されど吾は此の片身、片心なり。自然よ教へよ、吾は苦しみつゝある也。
爾救へ。吾は愚なり。小なる智識もなし。凡て爾の支配の下に立つ。
見よ吾は妻の件にすら、自ら其の何れにして眞に可なるやを知らざる也。
嗚呼吾は存在なり。故に吾は爾を呼ぶ。自然よ來たりて吾に語れ。
吾は忽ちにして虚榮に捕へられ、忽ちにして小我に浮沈す。此の吾の存在は確實なり。然らば此の吾とは何ぞや。
自由よ！來りて吾を救へ。凡て虚榮の獄屋より、小我の土藏より吾を救へ。
美の自然よ。吾が一生の希望と幸福と事業とを爾に托せん。　（午後七時半）

---

吉見をば樣に答書を出しぬ。曰く妻を娶る事は止むと。



虚榮と肉情とをはなれて判斷せよ。
虚榮はひそかに曰く、妻は爾の事業をさまたぐと。
肉情は曰く、妻は愛らしく爾に接吻し、抱擁せんと。
非なり、非なり、悉く非なり。
此の如くんば、めとるもめとらぬも共に非なり。
只だ一言を以て斷ぜん。曰く、
今は吾が變化の時機なり。熟しつゝあるの期なり。故に判斷の權力を有せず。故にめとるともめとらぬとも決する勿れ。たゞ之を延期せよ。自然に決定の時は來らん。然り、然り、大に然り。

四日。

昨日昨夜の疾風暴雨にひきかへて、今朝の美はしさ。春の終り夏の初めの朝の美はしさ。
早朝起き出でゝ散歩す。日已に昇れり。新緑雨にあらはれて綠いよいよあざやかに、朝風冷氣を帶びて輕く面を拂ふ。蒼空の蒼々たるを見よ。
仲の谷に至る。山かげは影ひやゝかなり。梢頭に光輝あり。小鳥は所々に囀る。
吾默々として行く。自から左右を顧みつ、蒼天を仰ぎつ、靜かに思へらく、嗚呼眞實の生命よ來

れ、妄想よ去れ、影の生命よ去れ、妄想の苦樂よ去れ、眞實の生命のよろこびよ來れと。
嗚呼實に然り。言ふ勿れ前途と。前途は妄想なり。妄想は「時間」の生命なり。「時間の生命」は自然が與ふる尤も眞實なる生命、永久の生命を殺す。
見よ仲の谷の中央を見よ。累々たる古墳をよ。
古墳は「時間」の生命をあざけりつゝあるなり。嗚呼永久の自然よ、美よ、神よ。愛の神よ、吾爾をはなれて何處にあこがれん。
草を見よ、木を見よ、其のせか〳〵しき色彩と生命とを見よ。オヽ清き風よ、潔き露よ。
嗚呼嗚呼希くは妄想よ去れ。惡魔よ、爾は吾を眞實の生命より離し、自然より、神より遠ざく。
あゝ「時間」の生命は咀ふ可きかな。時間は時間なり。自然の法則なり。されど時間のうちにありて時間のそとなる生命に入らずんば、人は影の兒のみ。
清き風よ、潔き露よ、美妙なる自然よ。
嗚呼美よ愛よ、吾を妄想の生命より救へ。　（午前八時二十五分）

---

自然は己を愛する者に負かずと。實に然り。爾心からして、小兒を愛せよ。小兒の無邪氣なる品



性は、忽ち、爾の心の泉に流れ入るべし。爾、心からして春を愛せよ。草木の美を愛せよ。更らに進んで、永久の生命ある天地の靈を愛せよ。なんぢの生命も、亦眞實にして永久、美にして樂しき、堅實なる生命とならむ。是、言葉に非ず。
今、高瀨の統坊來りぬ。此の七才の小兒は、無類に無邪氣にして眞卒なり。吾小兒を愛するの性癖あり。今にして、實に幸なる吾が性癖なりしを知りぬ。
統坊去りて感ずる事斯の如し。記し置く。　（八時四十五分）

---

不死を說き、永久を歌ひたる古への人々は、何處にある。
彼等は死せり。されど見よ。天地は死せざるなり。
人類の生命を見よ。更に進んで、宇宙の生命を見よ。
一個の生命と此の大宇宙の生命とを感瞑、瞑合せしむるものは、幸ひなる哉。彼は死に勝ちたるなり。
呼吸せよ、此の神の生命を。
然らば古人も吾なり。來者も吾なり。

眞實の生命は「美」たゞ之を與ふ。吾は之を痛感す。
妄想の慰樂に欺かれざる時は、亦、妄想の苦悶を受くることなし。

---

妄想は煩惱の父母なり。
現實無盡の美妙は、生命の源泉なり。
人間。存在。情感。
生死。大空。
春花。時間。
感じ來れば事實としては怪絶の事實、
嗚呼此事實の前に立つ吾、是れ何ぞ。　（午後十二時）

---

去れよ妄想の生命。
來れよ眞實の生命。



大空に燦爛たる星よ。常に吾を見下ろせ、凡ての時の夜毎に吾れを見下ろせ、其の深き光を以て。
眞實の希望よ來れ。
大自然よ。爾希くは吾に此希望を與へよ。
妄想よ去れ。時間の私生兒よ去れ。
されど妄想より煩惱に生滅する人間の意、此の天地間に遂に如何。
あはれむ可きは此等の他の吾なり。
眞に憐はれむ可き也。　（夜十一時五分）

五日。

能く考へ來る時は、吾は宇宙萬有人間生存等に關して何も知らざるが如し。實に何も知らざる也。
吾は愚者なり。愚弄せられつゝあるなり。されど世間勿論智者なし。彼等は知らざることを知らざる也。
吾はせめて知らざることを知りたり。
實に何も知らざる也。
宇宙は人間に餘りに大に、餘りに深きが如し。吾はただ感ず。感ずるが故に安んずるを也。

事實の前には吾が感情動く。

大自然、これ吾が眼前の事實なり。

英傑、詩聖、これ吾が眼前の事實なり。

されざ、更らに驚く可き事實はこれなり。

曰く、此の世界には愚迷にして其のまゝ死に去る人間の數限りなし。嗚呼これ何たる事實ぞや。

事實ぞや。

七日。春雨蕭々。

昨日は好天氣。收二の外、五名の同遊と共に、再び銚子淵を探る。美しき事、先遊にまさる。是れ新芽の節なればなり。午前七時半出立、夜の九時歸宅す。五名の者とは富水德磨、飯沼深二、尾間明、山口行二、藥師寺育造。先遊の際は、案内者を雇ひ、此の度は吾等兄弟案内者となりぬ。先遊の時は瀧を見る能はざりしも、此の度は溪流をさかのぼりて進みたるが故に、飛瀑の下に出づるを得たり。

眞に清遊は同伴者三人より以上なるを許さゞるを、昨日はじめて經驗したり。



同伴者多くして無益の談話多く、「自然」との談話少なし。殘念の事なり。

新緑は美なり。されど吾が心は寧ろ閉ぢたり。一同の遠行幻の如し。

水谷眞熊氏昨夜來狀。今朝返書。彼の曰く、東西學館に入りたり。余戒めて曰く、奇激の人物は自動的ならんとして、動もれば他動的となる。其間言ふに言はれぬ人情緻密の點ありと。

田村三治氏に返書す。

今日、英雄論の「豫言者」の部をはじむ。

五日の薄暮、近松のおさん茂兵衛を讀む。身は過去人世の呼吸のうちに在るが如し。吾人の父祖の呼吸に接するが如し。

五日の夜。また、われ六日遠行の際諸子の爲めに語らんとして考案すれば、諸感鬱勃として方寸の内に炎の如く起り、何れを何れと組織したる話柄を得る能はずして止みぬ。

嗚呼俗なる關係よ。嗚呼世の談話よ。

吾をして徒らに自然の眞感より離れしめ、吾をして徒らに小我の慾に從はしむ。

嗚呼吾に一室の閑書齋と、二三の良友とを與へよ。吾が世上より享くる幸福これにて足る。眞の余は世の與ふる能はざる所、吾が心靈の獨り自から求めて自から得る處なり。

鬱勃として宇宙を睨視し、昂然として心魂躍る。時に悚然として自然の大力を懼る。

嗚呼人生！人生！人類！人類！思ふこと愈々多くして、感愈々深し。

---

嗚呼吾は何事も知らざる也。實に何事も知らざる也。たゞ知る、吾茲に生活して存するを。たゞ感ず、茲は不思議の處なりと。　（夜十時五十五分）

八日

昨夜、ファウストを讀む。

今朝、天日曇りて、水蒸氣四面の山に漠々たり。

空氣沈靜にして、風物自から感慨の種となる。

木魚の響、何處よりか來り、蛙聲處々にふつゝかになく。心樂しからず。心底に涙あり。

---

されど自由は悲愁のうちにあり。



壯大無限の宇宙は自由なる悲哀なり。

九日。

今朝、「竹取物語」の新體詩其の一を作る。

今日、中桐確太郎より來狀。

昨夕、仲の谷を散歩（獨歩）、今夕收二と共に散歩。

---

來れ眞實の生命よ。

眞實の希望よ、吾が命よ。

吾が心は皷動しつゝあるなり。

此の大宇宙は吾をかこみ、

人類の生滅、歷史の事實は、

吾を大呼す。

吾は人として始めて天の下に立ちぬ。

吾は始めて自然の兒となりたる思あり。

吾は求めつゝあるなり。古の光を。
人々は苦しみつゝあるなり。吾は救はん。
十日。
吾ならぬ大界、恐ろしき法則、
吾事實の前におどろく。
吾は吾なり、吾吾を感ず。
大界を感ず。そもやそも、
大界の心如何。
大界と吾と何の關係ぞ。
來れ眞實の生命よ。
妄想よ去れ。吾爾を罵る。
星よ、吾となれ。花よ、吾となれ。
さらば吾まことに天のものとなり了へん。
地よ、地よ、地の心如何。



歴史は地上の幻か。
大界は無限なり。
無限！不思議なる言葉。
されどこれ事實なり。
墳墓は大なる事實なり。
歴史は人類の事實なり。
吾は吾の最大の事實なり。
吾是等の事實の前にをのゝく。
されど美！、情！
嗚呼神よ、眞の生命來れ！

---

樂しめ、樂しめ、安んぜよ。
人の心を樂しめよ。
樂みはゆふ顔だなの下すゞみ。

人の心を樂しめよ。
命なれ、これこそ眞の命なれ。

---

嗚呼吾今座して此書を繙く。
更けゆく夜の靜けさよ。
想ひ見よ、山々、谷々、大空や。
靜けき夜はさめぬらん。
聞けや、見よや、はてしなき自然の聲と色とを。
不思議の力の法則を見よ。
而も聞け人の聲を。
魂の聲を。
此の文はこれ人の聲。
此の世にありしたまの聲。
われ亦此の世に茲に在り。



吾亦かれのごとく茲に消えん。
魂の聲を聞け。
嗚呼たゞ人の天に向けたる聲をきけ。
吾が心をどりおのゝく。吾はしも、
此の世に生れし人なるを思へば。
雨、泉、月、星、花！
鳥や、虫や、なれ達も、此の世のうちのものなれや。吾も此の自然のものなりけり。
さても、さてまことの命、願はくは來たれ。
神にいのる、まごゝろこめて祈る也。
願はくば、眞の光と望と來たれ。

十二日。

昨夜、尋常小學校に會合す。
會するものは富永德磨、尾間明、高橋平吉及び收二と余と飯沼氏との六人なり。飯沼氏の宿直を
幸ひとして密會したる也。談合する處は上京の一件なり。

夜、暗を落してものすごく、時に雨沛然として至る。會する場所はすなはち舊城主の殿、會するものは爲すあらむとて、日本を舞臺として前途を夢想し、今日に扼腕する少年青年血氣の人々。

---

今や吾却て自から獄屋のうちに投ぜんとす。
吾、吾を知らず、存在の事實を知らず。
此の吾をとりまく宇宙を感ぜず。
只々少年浮世の妄想を樂しみける時は、此の身此の心却て自由なりき。吾をも知らず、宇宙をも知らず。
思ひはたゞ慾望自然のまゝなりき。
今は然らず、嗚呼今は知らず。
夢の世にせよ、現の世にせよ、
まほろしにせよ、うたかたにせよ。
吾はあくまで吾にして、宇宙はあくまで宇宙なり。
生くるも死ぬるも同じ事。



もがくも笑ふも同じ事。
吾、吾を忘れ得ず、此の宇宙を忘れ得ず。
事實は、然り存在の事實は消えざる火の如く吾が心根に徹し來たる。
嗚呼自由よ、來たれ、自由よ來たれ。
希くば信仰の自由よ來たれ。
然らずんば吾は咀はれたるもの也。
何となれば、既に已に此の事實を一度び感じたれば也。
一度び感ず、已に忘る可からず。
故に信仰の自由よ來たれ。
然らずんば吾は無限の牢獄のうちに座せん。
宇宙は直ちに獄屋となり、
吾は吾の鐵鎖とならむ。
死も力なし。かゝる時は死も力なし。
故に來たれ、信仰の自由よ。

されど吾、人情を信ず、情を感ず。
吾情を信ずる時、無限の自由を感ず。
情は神の心ならまし。
美や情の源ならまし。
情や、情、高き情よ。涙の情や來たれ！
神のなぐさめに來たれ！
吾たゞ爾を信ず。吾自由なり。

---

吾が智は渇ける口の如し。吾が情は燃ゆる火の如し。
吾は是非に此の渇をいやさゞる可らず。吾は是非に此の情を靜めて深き淵の如く安けらく致すを希ふ。
見よ、雨はれて夕陽美なり。吾茲に座す。
今吾茲に座す。夜は來り、窓外月白し。
吾が存在の事實一度び吾に痛感せらるゝ時、吾が生死生涯、はじめて現實嚴然たる事實となる。

---



今座して茲に在り。日本の戯曲を讀みては、吾が祖先生活の事實を感じて、復た「時」を感ず。
ヨブ記を讀みては、古昔感情の人の熱心眞情を思ひ、また此の「存知」の事實に驚く。昨日はファウストを讀む。これ近代のヨブ記に非ずや。われにアラビヤンナイトあり。
聞け。見よ。悉く存在の事實の深玄なる聲ならぬはなし。
今夕、谷に散歩す。新月梢にあり。溪流地にあり。森の暗黑く、葉の露玉の如し。自然と吾と存す。吾は自然のうちに在り。自然は吾のうちに在るや、否や。
十三日。
昨夜、夜やゝ更けて獨り仲の谷を散歩す。

---

爾人よ、妄想の世界より脱せんと思はゞ、
夜更けて獨り山林の間を歩め。
月光を踏んで獨り寂寞の谷を歩め。
獨り靜かにこみちを歩め。
蛙の聲、處々水田のあぜにかまびすし。

されどこれ人間ならぬものゝ聲と聞け。
獨り靜かに谷川にそひて歩め。
水に月うつりて、光美なり。
されどこれ人間のそとなる物の光と見よ。
爾が歩みは遂に累々たる墓地の傍を過ぎん。人！然りこゝにこそ人自からの仲間は眠るなれ。
天と地と靜かに呼吸す。爾獨りそこに立つ。人なる爾今將た如何。
嗚呼吾何故にかくは恐るゝか。恐るゝ心！これ何の心ぞ。何の恐れぞ。
谷間に獨り歩む。何の故にかくはおのゝく。
自然！　吾は自然を恐るゝか。
寂寞！　吾は寂寞を恐るゝか。
死！　運命！　不幸！　これ吾の恐れか。
自然！　たゞ冷然たる大空の虚か。
聽けよ。蛙、草のかげになき、
老梟、森のかげに叫ぶ。



吾は人！　嗚呼人！　此の自然！
自然と人と何の隔てやある、
吾、古墳の傍に立つ時に戰慄を感ず。
古墳新墓は何の故に恐ろしき。
此の下に死の骨と死の蛆虫と在り。
人はあらず、人何處にゆきし。
嗚呼人何處にゆきし。
吾在り、吾生きて在り、此の地上に在り。
此の自然、此の乾坤に、此の存在は何ぞ。
自然、自然、無限の自然よ。
月の光よ。星かけよ。此のこゝろに語れ。
嗚呼、寂寞の自然よ。
吾爾と交はる時に、はじめて妄想の世界を脱す。
寂寞の自然、吾爾のうちにあゆまん。

地上の生命は忽ち逝かん。何を考慮して徒らに取捨に迷ふぞ。

吾は豫言者として、詩人として、教師として、此の世界に送られたる也。吾は深くかく信ず。何となれば、吾は内に自から感ずる所實に之れなればなり。

吾は宇宙に嚴存して、人類の間に立つ。

此自然！神は吾に命じて曰く、

爾は豫言者詩人としてあれと。

否な否な、吾は此の外に在る能はざる也。

過去の人類を思ふて此の乾坤を觀、將來の人間を想ふて此の大自然を直覺し、而して更らに此の吾を思ふ。

嗚呼「タイム」何ものぞ。吾が精神は皷動し來る也。

十四日。

爾犬の生活を見よ。如何ににぶきぞ。たゞ眠りたゞ歩み、たゞ嗅ぎ、たゞ食ひ、たゞ吠ゆ。而して老ゆ。老ゆるを知らざる也。而して死す。死するを知らざる也。嗚呼これ犬の生命なり。



生命、而して死亡！　生存、而して空々！　人間の生命も其の大部分に於て、此の犬の生命と何の異なる處ぞ。夫れ異なる處なし、而も如何ともなす能はず。これたゞ此の天地間の事實なるを如何せん。

而も人なる吾等は此の事實を不問に附する能はざる也。

事實なり。されど其の意味を知らんことを希ふて止む能はず。

嗚呼天地間の生命！これ何の意味ぞ。　（午前八時五十分）

吾國、今日の形勢は、實に吾をして雄心徒らに勃々たらしむるものあり。政界に文界に將た宗教界に、大丈夫、大に振ふ可きの時に際す。されど吾は忍ばん、吾は實に忍ばん。

起ちて時難に當るは男子の本懐となす。而も吾は忍ばん。吾が立つ舞臺は精神の世界のみ。吾が上帝より命ぜられたる義務はこれなり。吾實にかく信ず。吾が少時の生ひ立ちより、其の後の傾向及び世界の精神界の歴史等を考ふる時は愈々是を信ず。吾は此の義務を口に誇りとなさん。此の義務を盡す爲めには世の中の最も小なるものにも安ずる也。これ神が命じ給ひたる義務なれば也。

吾が宇宙の神は、人として吾に何を要求するかを考へよ。
吾が心は吾が心として、吾に何を要求するかを考へよ。
吾が人類の歴史は其進歩に於て吾に何を要求するか。
吾が國は吾に何を要求するかを考へよ。
されど吾は何も知らず。如何に此等の要求に感ぜん。嗚呼何も知らず。宇宙茫々たり。吾が智は暗夜の如し。

十五日。

一昨日は日曜日、昨日午後、收二、富永、山口、尾間の四人を伴ひ、番匠川の下流に舟遊しけり。昨夜渚には共に芝居を見物しぬ。外題は朝顔日記、及び石井常右衞門なりけり、過ぎにし吾が國の人々の生活、社會、道德の有樣など感じて感慨多し。吾等は明治の人なり。明治の人と云へば、同じ日本とは云ひ乍ら、幼けなきよりの感染甚だ別樣にして、別世界に生れたる人の如きなり。不思議なるは吾が享けし運命にぞある。吾何とて猶五十年の昔には生れざりけん。只だ五十年の後に生れ出でたるが故に特別なる時代には遇ひたり。



過去の日本、世界各國の歴史、更らに自然より云へば昔ながらの不變不移の天地、吾が此生命、此の運命、思へば吾が心躍り、吾が情昂る。

人の尤も重大となすは人なり。人は人なれば也。人！不思議の觀念なる哉。吾は人なり。吾とは何ぞや。問はざるを得ざる問なり。
運命に安んずるは吾が目下の情なり。
義務は此の安心のもとに實行せらる。
この主宰、人類の神は吾に命じて、豫言者たれと言ふ也。詩人たれと言ふ也。吾が心は答へて曰く、是吾の義務なり。
嗚呼、冥々、茫々、悠々、不盡無極の宇宙、宇宙々々、爾われを助けよ。星よ、月よ、花よ、鳥よ、過去の人々よ、吾はたゞ星を見て星よと言ひ、花を見て花よと呼び、鳥を見て鳥よと言ひ、過去の人々を想ふ時に、嗚呼過去の人々よと言ふの外能はざる也。
山陽よ、高尾よ、石井常右衞門よ、マホメットよ、文覺上人よ、若しくは平家の公達よ、卿等何處にある。嗚呼卿等何處にある。嗚呼吾等何處にゆくべき。

十六日。

「吾」の上に行はるゝ宇宙の法則を見よ。生れたり。生長せり。老いつゝあり。而して死。

「吾」が周圍の宇宙のものを見よ。月、星、地球、(吾の住地)、草木、禽獸、光、熱、流れ、音響、大空無限のもの、此の法則を、此の現象を見よ、「君」とは何ぞ。然らば吾とは何ぞ。

嗚呼然らば問はん、實に此吾とは何ぞ。

---

平家物語を讀みて、其沒落の有樣を讀みぬ。

亡ぼされしものと、亡ぼせしもの、勝ちしもの、敗れしもの、今何處にある。物語は空しく子孫より子孫につたへられて、子孫は子孫につぎて何處にか消えゆく。只だ月白し。風淸し。宇宙あり。人の命、人の命運、此の生滅の法則は遂に如何。

吾此に此の事實の支配の下に存す。

宇宙は全體なり。神は全體の主人なり。

凡ての過去の歷史も全體の一部のみ。生れし人は死すと雖も人なり。神に「時」あらんや。

---



中桐確太郎氏に書狀差し出す。

昨日國元より夏もの送り來りぬ。

今日心地惡しく、熱强く、胸苦しさを覺えたれば休校す。

今、夕陽を追ひて少しく谷間を散步したり。夕陽は美なり。殊に、木の芽靑く繁り、麥黃に熟したる今日此頃の夕陽はひとしほ美なり。

十七日。

倦憊の思ひあり。人生は單調にして重複、人間は薄弱にして無智。かるが故に倦憊の思ひ起る。

されど、吾これを打消して曰く、

されど吾は存在す。吾は命を有す。吾は宇宙のうちにあり。

如何にもがくも悲しむも失望するも、到底吾は吾、存在は存在、生命は生命、死は死、宇宙は宇宙のみ。立てよ、堅く立て。かくして吾また奮然として起ちぬ。

---

過去の人々の歷史を讀む時は愈々人間生存の不思議を感ず。

嗚呼吾、生存す。吾、吾を見出しぬ、此の天地間に。

吾は逝かん、何處に逝かん。
凡て人々の逝く所に逝くのみ。
人、吾、二義にして一義のみ。
此の吾は甚だ高き使命を帶ぶるを知るべし。嗚呼人間の生活！聞けよ、かの歌を。彼等は樂しく歌ふ。
嗚呼人の生活！人の命。神は高し、善なり。

十八日。

昨日「竹取物語」の第三の一節を作る。
源平時代の風俗を知らんとて國史眼を讀む。大日本史等を讀まんとの心起る。其の過去の人々の生活の眞相、吾に甚だ暗かりしを覺りぬ。過去に「人間」あり。
「梶原景時」(戲曲)を作るの志あり。故に平家物語を讀み、或は史をひもとく。
嗚呼過去にも「人間」ありしや。
梶原、義經、文覺、今何處にある。されど宇宙は存し、人間は在り。過去にも人間はあり。
過去、過去、幽玄なる言葉かな。幽玄なる過去よ。



仰いで天を見る、過去なし。月を見る、過去なし。地を見る、過去なし。されど過去はあり。
人間！「時」の兒よ。
吾時を通じて爾を見ん。時をはなれて爾を見ん。

---

妄想の呼吸よ去れ。
妄想は自殺なり。
見よ、世人滔々是れ自殺の徒に非ずや。
爾何を恐れ何を憚かる。
將に此の間を濶歩せよ。

---

吾今寂寞の谷を獨歩し歸りて此筆を採る也。戰慄は吾が頭心より足の爪先に及び、吾をして幾度か勇を皷せしめたれども、吾遂に恐怖の爲めに勝たれぬ。
言ひ甲斐もなき事なる哉。
吾何故に恐ろしきやを知らず、只夜陰は恐ろしげなり。墳墓と森林は何故に夜に於て恐ろしきか。

嗚呼高天の下、上帝の宮に在りては吾は恐れぬ。

されど吾發見を得たり。

吾が知らざりし高き眞の世界は吾が恐怖の關門の奥にあり。寂寞として只だ森と溪流と星影と月光と谷風と梟聲と高天と吾との世界の如何に眞實の世界よ。

若し吾に愚かなる恐怖の念なく、心まことに此の寂寞を愛し、靜かに森の下に星影と月光のもとに眼を開きて沈思するを得ば、吾が地上の俗世の感染衣は全く落ち、存在の眞感に入り、神、自然、人間、吾が使命等に就いて更に大に發明すべきに。

然り。吾が眞の書籍、眞の敎、眞の世界は吾之れを發見せり。深夜城山の上に在り。月下無人の森林に在り。

「吾」は實に此の世界に在りてこそ發見し得るなれ。

これよりは凉風を愛する夏來る也。よし吾此の世界に入らむ。

恐怖！實に吾が信仰の極めて弱きを證明す。信仰とは空氣なる哉。若し此の社會と境遇と宇宙の何れの處にあるとも、一點の恐怖の念だにあらば信仰は空言なり。「神」とは空言なり。「神」とは嗜きと無意義の神のみ。愛は無意義のみ。



恐怖よ來れ。爾若し去らずば吾が腦を檢査せざる可からず、吾は何故に恐怖するかと。

月は人間の敵か、星は人間の敵か、暗き森と、さゞめく溪流とは人間の敵か、大空は人間の敵か、暗き影は人間の敵か、「偶然」は人間の敵か、墳墓の白骨は人間の敵か。

靜かに深く之れを思ふべし。

嗚呼敵か、敵にあらずんば何ぞ。

敵か、何故に敵か。

嗚呼天地間に於ける人間、爾は小なる哉。

恐怖と無明とは汝を小にす。

怒濤風浪の破船の甲板の上に於て、恐怖するものは誰れぞ。深山窮谷、猛獸出沒するの時に於て、恐怖するものは誰れぞ。吾人は勇氣を欲せず、必ずしも勇氣を望まず。只信仰を希ふ、安心立命を希ふ。

嗚呼、此の天地、人間の存在、精神情慾、互に關係する所何處ぞや。恐れ、いらだち、爭ひ、そねみ、惡み、苦しみ、焦がれ、時に幻の如き喜びを喜び、以て其の生命を消す。吾とても然り。

抑も此の生存は空か。

空とは空の事なり。空とは空なり。
吾たしかに玆に在り。

十九日。

嗚呼、森これ何ものぞ。吾と何の關する處ある。嗚呼山谷これ何ぞ。吾と何の係はる處ぞ。
老梟、月明、寂寥、これ何ぞ。
眞の信仰よ來れ。眞の眞感よ來れ。眞の希望よ、眞の喜びよ、眞の安心よ來れ。

---

今また寂寥の谷を歩して歸りぬ。(十一時十分)
明月に際す。吾が夜の最も美なる時なり。
恐怖は去りぬ、されど未だ全く去らず。
今夜は杉の森を過ぎて坂の頂の平場に出でたり。
人生は眞面目なり。
吾白狀す。吾未だ寂寞たる山林月光のもとに神を感ずる能はず。吾に斷じて大なる、堅き、眞の信仰あるなし。



たゞ自然は冷々然たり、默々乎たり。たゞそれ悠々として無限なるを感ず。
吾が魂何處にある、吾が靈何處にある。
吾は小なる哉。吾はたゞ五官に由り周圍のものを多少さぐるに過ぎず。吾が眼はたゞ星と大空と月明と森と墳墓とを見るのみ。
是れ何ぞや。吾は更に深遠なるものを見る能はざる也。
嗚呼吾が肉體は小なる哉。此の冷然たる土塊すら吾が肉體を永久に埋むるに一杯の土を要するのみ。見よ月光のもと、墳墓は累々たり。されど寂々としてたゞ夫れ石のみ。嗚呼人何處にかゆきし。
吾も亦只此の石とならんのみ。
物質は小なり。森林も月も山も、たゞ物質とする時は、如何に人間の世界は狹くして淺き事よ。
吾、此の吾、たゞ此の狹き淺き世界に苦しみて葬らるべきに過ぎざるか。
神あるか。靈魂あるか。
嗚呼此の存在の意味は如何。
寂寞の世に吾が情はたゞ荒れたゞおのゝく。嗚呼愛何處にある。美何處にある。

二十日。

吾已に十數前日に於て、一編のドラマを著作せんと決心したり。八月三十日までに成就せざる可からず。是れ讀賣新聞社にて募集する所の懸賞著作に應ぜんが爲めなり。吾に戯曲の天才ありや否やを未だ知らず。兎も角も今度は全力を注ぎて試みんと決心せり。宜し懸賞に失敗すと雖も、是れ此の事吾に大利あれば也。過去の生活を通じて人間の命運、性情、品格、精神を見るは是れ史劇の本色に非ずや。

人間！作劇は「人間」を學ぶ事也。若し夫れ岩の如き堅信に立ちて縱横に筆を驅り、以て人生の眞理を發揮するが如きは天の命のみ。天若し能ふ可くんば吾に命ずる時あるべし。

作劇は今日吾にありて學問のみ。

此の宇宙に於ける人間！存在に就ての學問のみ。

劇はアートなり。高想と美妙とを此の上に發揮するもの、詩人に非ずや。

日本！支那！印度！嗚呼吾は東洋の宗教の天に立つ。加ふるに西洋の哲學詩文は亦吾に在り。眞理と信仰とは吾と共に在り。

吾進まん、嗚呼吾進まん。　（午前八時半）



二十一日。

吾存在す。是れ吾に在りて最初の事實、最初の命運、最初の驚異なり。嗚呼吾確かに玆に存す。玆、是れ宇宙なり、自然なり。自然と宇宙は無極大、無限力なり。人は玆に生死す。

宇宙自然！然らば吾に在りて自然是何ものぞ。宇宙何ものぞ。

如何なるものも吾をして此の驚奇心を消さしむる能はざる也。

吾ならぬ他の吾は兎も角も生死せり。是れ事實なり。されど此事實は以て吾が存在の事實を柔ぐる能はず。何となれは吾確かに玆に在れば也。

嗚呼吾が生、畢竟如何。何を信じ何を爲し何を樂み何に安んず可き。神か、善か、人情か、美か、進歩か。

若し眞に然るを得ば幸ひなる哉。悲い哉人間。愚かなり、弱し。

愚かなり。弱し。然れども吾が存在は存在なり。神在しますならば神在します也。

---

昨日は日曜日、好天氣、午前八時教會堂に出席す。

感話す。午後、富永、山口、收二の諸子と共に小學校宿直室に飯沼源二氏を訪ふ。快談時を移す。

四五氏伴ふて城山に登る。夕陽まさに闌なり。山々、疊々相重なり、蔭紫色に青空は遠し。水流黄熱の野を回流す。其の美言語に絶す。

昨夜教會堂に出席す。感話す。

昨夜の月の美しさ。

獨り靜かに感じぬ。然り、宇宙は無限なり。

自然は冷然、頑然、默然、而して活動不止。

人間は玆に生死す。如何に生くべき。何を心靈の力と爲す可き。信仰か、何の信仰か。然り、吾人情を信ず、愛を信ず、美を信ず。

而して神を全信確信すと言はんと欲す。されど吾が確信は實際は實際の上に於て弱し。之れ吾の弱き也。

されど吾は美と情とを信ず。

嗚呼全き法則、全きものよ、則ち自然よ。

爾は母か、土か、育力か、善意か。



人情とは何ぞや、嗚呼ヒューマニチーとは何ぞや。

山谷の茅屋に響く聲、

孤島の漁村に起る歌、

營て戰營の兵士の夢みし夢。

月光のもと、明花の傍、

風雨の夜、雪の夜、

感ぜざらんと欲して能はざるもの。

母の夕の子守り歌、

友のあしたの離別のこゝろ、

嗚呼人情とは何ぞや。人の心のなみだのみ。甘露の如き涙のみ。古今東西の人の情のみ。

二十二日。

昨夜、雨繁く風強し。悠然として哀情多し。他の吾を思ふ。而してまた古人を懷ふ。

カーライル何處にかある。彼の叫びし聲は書中に印せられて吾が傍にあり。されどカーライル、彼、今何處にかある。ウォーズウォルス何處にかある。シェークスピア何處にかある。

彼等の詩想の愈々高尚なればなる程、彼等今なきをあやしむ。賢者、詩人、聖人、皆逝く。あゝ生れしものは皆ゆく。「生」の國民は「死」の國民なり。

東坡何處にかある。赤壁のもと、月光を仰ぎ、江流に泛び、古英雄を吊し、盈虛を感じたる東坡何處にかある。つひに〳〵何處にかある。全體、宇宙は全體なり。神は全體の心なり。全體の善、全體の美、全體の眞なり。

全體、ホール、然り全體は全體なり。過去も全體の一部分、未來も全體の一部分、時、空間、其の無限こそ全體なれ。生死、全體なり。

嗚呼此の全體を離れて何處にか逝きうべき。全體の美と眞とを離れて何を求め何を信じ何による可き。（午後十一時半）

二十三日。

昨日石崎ため子氏より書狀あり。處身の法に就て頗る心配せる樣子、吾に向つて種々と相談する處あり。女子の處身に苦むは憐れむべし。殊に教育を受けたる今日の女子の立身法に苦むは別して同情に堪へず。今夜一書を飛ばして分浦作平氏に、ため孃のために小學教師の職を周旋せんことを依頼したり。



今井氏より今夕書狀あり。氏も亦甚だ精神的病に罹り居るが如し。一書を送りて慰め置きぬ。今日峰泰世氏より來狀あり。又た一書を送り置きぬ。

昨今富水氏來る。

夜更けて弟と共に月を踏みて田野を歩みぬ。

---

「吾」と「宇宙」との眞の關係を直覺せしめよ。

宇宙はホールなり。ホールなる宇宙、吾に取りて何の關係あるぞ。知らざる可からず、直覺せざる可からず、信仰をたしかめるべからざる也。

---

二十四日。

嗚呼不定にして迷へる生命なる哉。

浮き草の如き思想と感情なる哉。

明言す。吾と宇宙との關係は甚だ曖昧なり。

明言す。故に明言す。

吾は喜ぶ可き權利なく、怒る可き理由なく、怒る可き權利なく、誇る可き權利なし。

勿論、世人皆な然り。吾よりも一層然り。

しかし其の故を以て吾はすこしも中に自から顧みて安然なる理由なき也。實に浮薄なる生命と謂つべし。

宇宙はホールなり。

吾はホールの(吾に在りては)中心なり。

吾に、より昔なく、より未來なし。

吾、存在す。吾存在す。然り。

存在は眞面目の事なり、吾には眞面目の事なりと見ゆる也。

然れども吾は能く吾を知らざる也。吾は善人なりや、惡人なりや。強き人なりや、弱き人なりや。

智ありや。愚なりや。吾は實に吾を知らざるが如し。

たゞ知る。吾は吾にして宇宙は宇宙なること、生命は眞面目の事なることを。多き吾より以前に生れたる哲人達によりて唱道せられたればとて、吾に在りて依然として吾の生命は最大、最初、最



眞の事實、問題、なることを。

吾は斷じて不定なる生命を希はず。

吾は今日まで、吾が生命の甚だ不定浮動なりしを知覺せざりし也。今や今日知覺す。是れ強きを得るの一端なり。

明天に至るの一端なり。

二十六日。

昨日の記は昨夜教會堂に在りて感じたるもの也。

---

吾は先入的妄想の生活を極排す。

希くは吾をして尤も冷やかなる處、尤も明かなる處。尤も美にして清き自然の處に立たしめよ。

吾が情、吾が意、たゞ忽如として動き突如として轉ず。

吾が生命は實に影の如き浮草の如き命なり。嗚呼宇宙はホール、吾は人。

吾如何に生く可き。

眞實に不變の望と喜びと力と來れ。

神は吾に遠し。

吾は何事も知らず。

昨日中桐氏より氏の著述にかゝはる哲學變遷史を送らる。今夜は已に上代哲學を讀み了はりぬ。

一昨日藥師寺氏大分より歸り、兼て依頼し置きたる源平盛衰記、保元平治物語の二書を購求して携へ來りぬ。已に少しく讀みたり。今日國元へ書狀を發す。

昨夕國元より來狀、父上腦病の由申し來る。

---

吾が目下の情は滿足もせず失望もせず、たゞ鬱勃たるのみ。

宇宙は吾に漠然たり。

故に吾が行爲、感情に一定の眞面目なし。忽ち昂り忽ち亂る。偏に浮雲の如し。

宇宙の眞體は不變の靈妙最高のものなり。吾が心は之に遠ざかり居る也。

故に一定せざる也。

美と生命と希望と情實と來れ。

吾を働かすものは俗情多し。



花よ、花よ。月よ、月よ。

來りて吾を救へ。吾實に爾を愛するを希ふ。

二十八日。

昨日は日曜日。會堂には出席せず。水谷氏より來狀。直ちに返書す。中桐氏に一書を差し送る。

午後は諸友と共に桂港の海濱に至り、吾先づ海に入り今年始めての游を試む。

---

吾が生命はたゞ吾が出來心にて支配せられつゝある也。吾は糸を絶たれたる紙鳶の如し。吾が出來心は風なり。飄々として一定する所なし。吾に力なし、吾に喜びなし、吾に眞の希望なし。一言以てすれば吾に眞の信仰なし。

嗚呼吾、吾は吾を咀はざるを得ず。吾は地上の幸福を希はず。されど吾が心は暗し、光なし。

萬事を擲つて只光を求め、力を求め、岩を求め望を求む可きか。

日々の生活は何の意味ぞ。たゞ一定せざる喜怒哀樂の束縛に過ぎざらむとす。

よし、まゝよ、人間は然かる可く造られたりとあきらむべきか。

されど宇宙はホールなり。吾が存在は吾にとりて避く可からざる、忘れあきらむ可からざる事實

なるを如何せん。
止め止め止めよ。愚言のくり言を止めよ。
吾は存在す。
他の「吾」を思へ、小我の煩熱を脱離せん。
人情と美妙とを感ぜよ。喜びに入らん。
神を仰げば、希望と勇氣に入らん。
哲人達を思へ、高き情を得ん。
嗚呼目下吾が法律は是のみ。
吾は願つて死なん。
吾は願つて死なん、ア、然り。
喜びも悲しみも、
感じたまに〳〵願ひなん。
吾が心は人の心なり。
吾が情は凡ての他の吾の情也。



吾はたゞ願はん。
然り、吾の喜樂と義務は是れのみ。

過去は、我てふ時の兒に在りては已に「なき」もの也。されど宇宙はホールなり。過去、現在、未來、死、生、凡て一つなり。
一度ありし事實は宇宙より消ゆる事なし。
罪は此の故に罪なり。

睇視せよ、意味あらはれん。
月を、花を、人を、鳥を、
墓を、川を、若しくは森を、
嗚呼睇視せよ。
意味は自からあらはれん。
夜を睇視せよ、星を、大空を。

吾を動かすものは虚榮か。吾を動かすものは恐懼か。吾を動かすものは何ぞや。習慣の魔か。
吾が友は誰れぞや。
吾が喜びは何ぞや。

義務！
これ強き聲なり、嗚呼義務！
これ吾を導く唯一の道なり。

二十九日。
犬、雀、蜻蛉、蛙、是れ等は今日吾が眼に映じて一種の感を與へたるものなり、然り未だ嘗てあらざりし處の感を。
此の宇宙！此の宇宙に於ける犬の生命、蜻蛉、蛙、雀是何ぞや。
彼等は生く。嗚呼彼等は吾の如く生く。彼等はおのがじゝ生活す、行動す、人間の如くに。
彼等は死す、而して吾も亦た彼の如くに死す。犬にべゝると稱するあり。



近家の犬なり。彼は吾を親しみ、吾が聲に應じて喜ばしげにうなり鳴き、尾を振る也。
彼の心如何、如何。彼を稱して犬と稱す。
嗚呼犬！　神は犬を造り給へり。
冷然たる此宇宙、無限無極の此宇宙、其の現象、其の法力、これ吾が生命の前後に横はる事實なり。
吾が生命！　是れ吾に取りて最初の事實なり。
感じ去り感じ來る、言ふ可からざる神秘の情は心の底より、湧き來るなり。
宇宙はホール、古往今來、誰れか宇宙の外に生れ、宇宙の外に逝く可き。
吾は此の宇宙の人なり。
神！　已に神と云ふ、爾の此の言にして眞に爾に其の意味を有するならば、爾は續て云へ。
義務！　信仰！　愛！　美！　勇氣！　平安！　滿足！
嗚呼此生命を此宇宙に感ず。此宇宙は神の宇宙。
咄！　咄々！　死の後に光あり。

三十日。

光と暗とを感じぬ。

宇宙はホールなり。生滅す、變轉す。而して遂に宇宙の外に出づるに非ず。神は變ぜず。

人間！

三十一日。

暗と光との戰爭、されば神は支配せり。

見よ、此の壯麗にして　大無限の宇宙を。

轉々してしばしも止まざる也。

嗚呼吾は吾が生命を感ず。

宇宙はホールならずや。寂然たり。されど生命は此のうちにあり、玆に在り。

過去の人々、其行爲、其生命、其感情、凡て其の一厘一毛も　宇宙より消滅せざる也。宇宙凡て

を包みて永久に立つ。吾は玆に在り。

人間！人間！　嗚呼人間！

宇宙はホールなり、ホールはミステリアス也。



嗚呼宇宙――と呼びなす此のもの。

過去も此にふくみ、未來も、玆にふくみ、

吾も亦此の如く在り。

星！　日！　花！

禽獸草木のかず〳〵、

變轉――、上下――、生滅――、流行す。

あゝ宇宙、ホールなる宇宙よ。

凡ての現象、事實、思想、法則、傾向、

包みて此のうちに在り。

寂寞として燃え、默然として沸く。

見よ、諸々の人々の生活の現狀を。

あゝ此の宇宙に於ける此の人間！

兎も角もこれ吾なる人に取りては、

最初最眞、最中心の事實なり。

吾は人間の情を信ず、
宇宙の生命を信ず、
生命の源を信ず、
生命の目的を信ず、
其の善、其の義、其の眞を信ず。
たゞ暗黑はまた吾に在り。
光明は天に在り。
吾は暗黑のうちに獨居す。
故に迷ふ、故にまどふ。
吾知らず、吾知らず。
宇宙は冷然たる死物か、
宇宙は聖なる神のものか、
宇宙はホールなり。
ホールは死物か、死物なるホール如何に此の吾を生みたる。



吾は生命を信ず。

## 六月

一日。

漠然たり、瞬昧たり、又實に暗々たり。若し心を定めて爾の生存する此の宇宙に對する時に於ては、如何に爾の心のおのゝくよ、存在！

これ言葉にあらず、傳說に非ず、慣習に非ず。實に爭ふ可からざる事實なり。

已に然り。

吾、吾の存在を感ずる事愈々强くして、宇宙のミステリアスを感ずること愈々深し。

ミステリアス！

これ言葉に非ず、直覺直射の電光なり。

嗚呼人間！

暗黑を迷動して知らず、たゞ薄弱に只無明にたゞ偏頑に只妄執に生滅す。

吾が信仰は何に依つて立たん。
然り、然らば吾が信仰は何に依つて立たん。
只吾に最遠妙通の情あり、美妙にふれ至誠にふれて動く。
吾が光はこれのみ。

---

さらに偉大、さらに光明、更に剛毅！
さらに信念！　人間よ、爾は蠶の皮脱して化身し一躍一飛して蛾となる如くに、更に高きに脱出昂飛する能はざるか。
嗚呼さらに光明、さらに偉大、さらに神聖、さらに信念。
茫々幾千年の人類、暗より暗に迷ふ。
二日。
人間は實に暗黑の裡に坐す。時に一日の信念の靈火を通じて光明を見るのみ。
茫々たる此の宇宙。時の無限と場處の無極とをつゝむ此の宇宙。
暗黑！暗黑々々、されど生命は光なり。



されど吾生命の源を信ず、故に光明の心を信ず。
此の宇宙に此の生命。
調和何處にかある、本意何處にかある。
生命其のものこれ調和に非ずや。これ本意に非ずや。
哀々たる哉、悠々たり、田園の生活！茫々たり、此の宇宙、光と情とは神にあり。

---

生命！　！而して此の自然宇宙。
生命の源、生命の心！何處に求めん。
信仰何に由つて立つ可き。
漠然たり、「吾」と「自然」との關係。
恐ろしき自然、廣遠無限なり。
「吾」はたゞこゝに戰慄して立つか。
嗚「吾」！　自然を知らず。
黑死病は流行の猛勢を張らんとす。

死！偶然！命運！
「吾」は是等の暗影におのゝく可きか。
嗚呼暗黑の兒よ、去れ。
小我虛榮恐怖、皆暗黑の兒也。
神は大なり。
昨朝バーンスの To mouse を讀みぬ。
早稻田文學を讀みぬ。

---

源平盛衰記を讀みぬ。
英雄論を講じて愈々カーライルのシンセリティを味ふなり。
昨日國元より來狀、昨日吉見氏より來狀。
金子氏よりはがき。
諸友よりの書狀は吾をして人間を思はしむ。

---



已にシンセリティ也、而して信仰、希望、光明なくんば生命は重荷なる哉。若し人にして虛榮と小我とに離れなば、
嗚呼生命の意味は深長なり。痛切なり。
「人間」の意は深し。

三日　日曜日。
吾人間の光明を通じて、更らに無限の光明を仰ぎ、
吾人間の暗黑をのぞき見て、更らに無限の地獄を見る。
宇宙自然の生命は「吾」人間の生命にして「吾」人間の生命は宇宙自然の生命なり。
光明人にありて亦宇宙の心にあり。
暗黑人にありて宇宙の陰を見る也。
更らに深遠更らに超絕！　（夜十一時十五分）

四日。
光明天地に充ち、大道宇宙に行はるゝこと、果して人間が確信し得ることならば、何故に「吾」人間は已に古物を愛するが如く、古聖書にのみ歸依するか。

上帝(宇宙ホール)統轄し給ふて人生を愛し、常に大道をたれてこれを導き給ふこと眞理ならば、曰く、

吾は人生を享けて、宇宙に在りて人と交はる、また將に大道を悟覺して、之を衆生に明示す可き也。

嗚呼人生！

と謂はんならば人間！爾の意味は深遠なり。過去現在將來の「時」吾に在りて何かあらん。

生命宇宙に周流し、大神無窮に統整す。「吾」の立場はこれのみ。

されど地上の「吾」は遂にこれ幻なる哉。吾は幻に非ず、吾が生命は不死なり、死は地上の幻のみ。故に地上の生命も幻のみ。「吾」！ これ不朽の自覺なり。それ然り地上は幻なり。これ眞理なり。

地上は幻と稱するものなり。更らに眞實なるものは靈界なり。

---

昨夜教會に於て「シンセリティ」を說く。

ひたすらに思ひつゞくるものは「梶原」なり。



今夜「たけとり」の一節をものす。

---

已に宇宙のホールを感じ、吾が生命其のものをこのうちに痛感するか。

冷々自から失して此の冷界に消滅を呼ぶか。二者一ツのみ。

大綱はこれなり。

而も不思議にも此の二者相まとふて「吾」人間をなやます。

兩方眞實か、兩方空か。一方眞、一方空か。此の三決定のみに出でず。

人間は客觀し、また夫れ自からに於て宇宙の最妙物なり。

人間は人間を趣味するを知りて始めて「吾」のふかさを知るべきか。

とも角余近頃、人間其のものを見るなり。

人間の事の面白きは、其の歷史に非ず、其の行爲に非ず、

人間其のも　なり。

此のこゝろを以てすれば、人々人として其面白きを極む。

---

人間よ、更らに光明、更らに剛毅、更らに信念。

五日。

宇宙はホールなり。凡ての過去、現在、未來、凡ての人間、凡ての出來事、凡ての命運、山河草木、月星太陽、無形有形、法則衝突、凡ては宇宙ものなり。

これを以て「吾」なる人は、之等の差別變化のうちに最眞の神を感識するなり。

宇宙はホールなり。吾をして幾度も此の意味をくりかへさしめよ。

最眞の神を感じ、信念火の如く起る也。

---

宇宙はホールなり　然りまことに然り。

月よ花よと呼びかけん。

星よ鳥よと言ひ呼ばん。

あまつ大神たゝへなん。

さり乍ら、はつきりとせぬ信仰は、

常のよろこびもなく、常の悲みもなく、



常の剛毅もなく、常の希望もなし。

明かなる信仰よ來れ。

神よ、大神よ、愛に充ち給ふ神よ。

六日。

宇宙のホールに坐して人生を達觀する時は、否な吾未だ宇宙のホールに坐する能はず。慣習と先入と小我の偏界に盲動するのみ。仄かに人生觀の眞感を享けんとして未だ至らざる也。

これを以て倦憊の情は悲喜悉く根底なからしむ。

---

窃かに感ず、此の世界は幻のみ、變々化々、個性は夢の如く生滅す。

「昨」　これあるなきなり。

「今」　たゞ感覺意識す。

「未」　たゞ想像す。

ありし「今」なし。「時」の裏永遠なかる可からず。生命は永遠のものならざる可からず。

されど地上！此の世界！此の人生！

紛々たり、眞意何處にかある。

「人間」吾遂に如何。

希くは更らに信念、更らに光明！

---

聞けや「近代」の聲、紛々としてこれ批評解剖妄想の聲に非ずや。彼等が實際と云ふは、これ彼等の妄想のみ。唯物、論爭の世界とはなりぬ。嗚呼人間よ、更らに光明を望め、更らに信念を望め。

高き叫び何處にかある。

男女相率ゐて權利義務、批評爭論の世に走りつゝある也。

---

吾が信仰は極めて漠然たり、吾にシンセリティ乏し。

吾はたゞ盲動するのみ。

宇宙、宇宙！　自然、自然！爾と吾との關係は何故にかくまで曖昧なるぞ。世間の聲は吾を鼓動す。

さり乍ら自然よ、自然の大聲は耳に入り難し。世間の法則は目につき易し。而も自然よ、爾の大法則は之を不問に措かんとする也。

小我、先入、慣染の衣は着し易く、信念の心は昂し難し。

嗚呼更らに人間の光明、更らに我が信念、自然と人生とは口頭の言語に非ず。

人を動かすものは何ぞや。

信念に非ずんばヴァニティのみ。

信念なくんば放逸に流れ、然らずんば虛榮を望む。

七日。

今日登校を止め、今井氏に與ふる書を記して只今（夜十時）まで費す。書する所は吾が近頃の思想なり、大約此の日記中に現はれし心なり。

美は信ずるに由りて美のみ。批評して何の意味あらむ。

美を信ずるを得ば、吾と宇宙との關係に多少の光を與へん。

吾美を信ずと信じたり。

されど「生命」を信ずる能はずんば美を信ずる能はざる可し。

冷然たる天地の一片肉にありて美何かあらん。

嗚呼何者をか信ぜんことを欲す。
大神を信ぜん。大神を信ずるの外能はざるに非ずや。
更らに光明、更らに信念。

八日　土曜。

昨日は細雨蕭々。今朝は日光赫々。山野に光輝みち、蒼空に清凉みつ。仲の谷を散歩せり。路傍の草花露にうるほひ、頭上の新緑のかげ冷やか、人間の住み家は玆なり。心を開きて見よ。

---

「近代の妄想」は恐る可き哉。

近代の妄想とは何ぞ。

近代思想より起る妄想なり。これは近代の教育ありて近代の思想に感染したるものに見る處なり。

此の妄想は目下最も進歩せるものゝ懐く所として横行しつゝある也。

新聞記者、政治家、教育家、科學者に最も多し。彼等は信仰の人宗教の人を目して妄想家視す。

而して却て自家また「近代」の妄想に狂迷せるを知らざる也。

嗚呼「近代の妄想」とは何ぞ。



吾國人にシンセリティあること少し。否近代の世界實に然り。否な古昔とも然らん。嗚呼更らに明瞭に宇宙の秘密にふるゝ能はざるか、人生は秘密なり。

但し只だ心を開きて自然の前に立て。人間と自然との關係を尤も卒直に感得せよ。吾はかく言ふ。

猶ほ言葉たるをまぬかれず。

吾は更らに深く信ずる處を得るを希ふ。神に就ては勿論なり。吾が生命について、美について、善について。

『人類的主觀』は人間の希望、信仰、生命、法則なり。

人類的主觀をはなれて宗教、哲學、詩歌なし。

人類的主觀に在りて自然を視る時にはじめて大神を仰ぎ得ん。人類的主觀に在りて花を見、月を見、人を見る。美の信、善の信起る。然らずんば吾が宇宙との關係はノンセンスのみ。

嗚呼吾は人間、吾に生命あり。吾此の宇宙に立つ。吾にたゞ此の主觀あるなり。

宇宙は神聖不思議なり。此の主觀に在りて愈々然りとなす。

---

「近代の妄想」とは要するに人類的客觀の幻なり。

今日海水浴を試む。

九日。

妄想とは何ぞや。空想とは何ぞや。

世人やゝもすれば曰く、哲學者、文學者、詩人、宗教家悉くこれ妄想空想の徒のみと。何ぞ知らん。妄想空想とは人間通有の弱點にして、謂ゆる自から實際眞實の世界に住むと思ひ居るものも皆々それ〴〵の空想は存し、「國家」「社會」「殖産」「實地」云々、しきりに地上の事を以て妄想ならずとなすものゝ、其の實、彼が腦裡さま〴〵の空想妄想に充たされ居る事を。

嗚呼人心を啓發するものは誰れぞ。

天下の人々、滔々是れ共同的利慾を以て公益と稱し、其の他、彼れ是れ、悉く是れ空、虚、夢の國民なり。

彼れ等は眞實の人生を知らざる也。

嗚呼人類、嗚呼宇宙。



もろ〳〵の個人に告ぐ。爾は人類にして爾は宇宙のものなることを。

今日海水に浴す。海波靜かに磯を打つて來るを見る。

天茫々として限りなし。嗚呼此の自然！　吾茲に立つ。

十一日　月曜。

昨日は日曜日。午後海水浴を試み、午後は富永、尾間、收二の三子と共にまた海水浴を試む。自然に自由に面して、自由に海風と遊ぶ。自由の幸福はこゝにあり。昨日は近來めづらしき暑氣。昨夜を以て「梶原」の第一レーン成る。

語に曰く、

人生ニ天地間ニ忽成ニ遠行客ニ（トシテ）と、人類然り。此の人類の天地間に於けるまた實に然り。

故に人は決して曖昧なる信念に安んずる能はざる筈也。

天地それ冷然たる無窮、唯物の變化盲動に過ぎざるか。天地それ靈心靈神の統治のもとに在りて人類は此の空に愛着せらるゝものか。二者其の一のみ。

而も此の人類自身よりすれば、其の自然の心情は、將に後者を信ぜざらんと欲すとも得べからざる也。

嗚呼人類！これ人類自身に形りたる生存に非ず。

生命其のものゝ源は神に在り。

此の生命！　此の生命を感ずるもの將に神を信ぜよ。

---

場處に於て、空間に於て、無限無窮なる大自然のうちに生滅浮動する人類！人生、これ言語に絶したる事實なり。吾益々之れを感ずる也。已に此の事實を痛感す。人間の事件、自然の事物、其れ自からに於て、悉く其の意味を深玄不思議の邊に達す。

夫れ實に人類は自然の兒なり、自然を忘れて人間を考ふる能はず。それ「吾」は人間なり、人類を忘れて自然を思ふ能はず。これ眞理なり。已に此の事實を痛感す。これ根元、最大、最新の事實に打たれたる也。宜べなる哉、人事に在りては、戀と云ひ、歴史と云ひ、悉く此の意味に於て深遠なる事實を感ずるや。然り自然に於ても然り。ア、高偉壯麗の自然！嗚呼理想沈思冥思も玆に於て始めて致すべし。



「吾」に取りては此の世界は幻のみ。

「吾」に取りては眞實に永遠の生命を要す。

十二日　火曜。

昨夜「梶原」第二レーンのはじめ成る。

---

嗚呼名譽吾を繫ぐに足らざる也。事業、吾を繫ぐに足らざる也。美、善、戀、宗教、凡て吾を繫ぐに足らざる也。此の天地吾を繫ぐに足らざる也。此の人間社會、吾を繫ぐに足らざる也。月、花、凡て言ふに足らず。

嗚呼然り、然り。吾たゞ信仰を希ふ、たゞ信仰を。吾は凡てをあさりて凡てつかれたり。唯信仰の遠雷を聞いて心とゞろく。吾はたゞ信仰を希ふ。

美！吾これを信ぜんことを欲す。

善！吾これを信ぜんことを欲す。

然り、神、然らずんば無。光、然らずんば暗。吾は其の何れかを信ぜんことを欲す。

嗚呼信仰は自由なり。

然り、眞の自由はたゞ夫れ信仰なり。

而して吾未だ此の自由を痛感する能はず、時に一閃の光に導かれて其の一端にふるゝのみ。

三日　水曜。

昨夜舟を蓄匠の流に泛べ、月光に棹して、富永氏を灘村の校舍に訪ひぬ。同舟者は尾間、山口、收二の三人、吾を加へて四人。

月明流れに滿ち、山岳の影、倒さまに水に落ち來り、四顧寂々、あたかも湖面をゆくが如し。

歸來此の美景、眼にのこり、心に活く。

吾は美を信ぜんことを欲す。

さきには吾たゞ美の力を信じたり。曰く美を信ずと。これ非なり。

寂寞、幽遠、光明、暗澹の世界。吾が生、こゝに在り。古人の生、こゝに消えぬ。吾、何處に適歸せん。四顧茫々然。嗚呼吾信仰を欲す。虛榮、小我、比較、焦念、束縛の衣よ去れ。信仰、自由、大我、眞實の生命よ來れ。

---

野邊のすそ、川邊に一つ

住家あり。

月かけにすかして見れば

茅屋なり。

誰れか住む、住む人は誰れ

問ふまでもなし。

世に生れ、貧しくそだち、哀れにも

寂びしく暮す、一家なり。

名も知れぬ、名もなき（浮世の）

人々ならめ。



事實の前に公平正醇に立ち得ずんば、決して信仰に至る能はず。言ふ意味は左の如し。人は新らしく聞する所に迷ふと同時に、また久しく見聞して熟感する所に同化するものなり。此の故に彼が人生の事實に對するや、兎角偏する處あるなり。偏すれば妄す。故に其の信念や亦甚だ偏す。天地の間、人生のうちに起りし事實、宇宙のうち、人間の眼前に現はるゝ事實。悉く其の意味深し。

今や朝鮮事件に人々多く其の耳を熱くす。されど山間の月は依然として美に且つ幽なり。貧屋の賤婦は依然として迷暗、困苦、罪惡の間を出入す。花は美しく垣に傍うて咲き、鳥は高く雲を貫いて飛揚す。

自然、人事、悉く事實ならぬはなし。人はたゞ自家の習熟する處を以て人生唯一の事實となさんとす。偏迷妄執の基なり。

見よ、國と國とは爭ひ、民と民とは戰ふ。是れ目下吾が新聞紙上に滿ちたる事實ならずや。

西洋の文明、東洋の文物、吾人の歷史に其の跡をのこし來る、これ事實なり。

地球の遂に滅亡する、また想像中の事實なり。人間、其の終極は死のみ、之れ事實なり。宇宙はホール、無限無窮なり。之事實也、如何、如何。

吾實に人として此の宇宙に在り。宇雷をはなれて人生を思ふ能はず、人間をはなれて宇宙を考ふる能はず。

嗚呼人間！「吾」はこれなり。

十四日。

朝鮮の內亂、淸國の出兵、吾が國民の激昂、歐洲兵備過重の壓迫、地上の事件紛々たり。月皎々、



草菁々、天蒼々、自然の推移は默々として然かも嚴然たり。

沛然として大雨來り、農夫欣々として野に在り。夕陽雲に炎々、岳色翠を滴たらす。吾何の心を以て此の事實に對す可き。

人動きて歷史出來、人考へて哲學生る。

信ずる者人なり。

「近代の妄想」は、神の世界に生れて居乍らわざ〳〵之を忘れて自家尺度の物質世界のうちに住まんとす。

吾、人として此宇宙に生る。吾これを意識す。而かも吾此の宇宙人生の事に就いて知る能はざるなり。ア、これ恐ろしき事實に非ずや。

十五日。

昨日午後六時ごろより、桂港に海水浴に出で行きぬ。

其の少しく前大雨ありき。

昨夜「景時」を作る。

昨夜、夜深けて獨り月下に散步せり。

無心にして月光に對し、靜かに蒼空の星影を仰ぎ見る時に於ては、實に吾が生命と此の嚴肅なる自然との如何に神聖に相關係するかを感ずる也。

然り、吾をして願くば無心にして凡ての事實に對せしめよ。

無心とは公平の意味なり、シスセリティの意味なり、自由の意味なり、獨立の意味なり。

人若し先入の事實にのみ偏感せずして靜かに自由に獨立に眞實に、爾の前の事實に對する時は、如何に爾の智識の眞實なる可きぞ。嗚呼吾、人として月に對せんことを希ふ。

人として、然り、人として、人！ 凡ての意味は此のうちに在り。豈に月のみならんや。此の舊城に、此の茅屋に、此の歴史に、此の山川に、彼の大空に、此の墳墓に。

事實！ 人の驚く可き事實豈に遇然の出來事のみならんや。天地と吾が生と、先づ最深最大の事實ならずや。

---

吾が心慨然として歌はんことを希ふ。

心情の大絃は天地人生の神聖に鳴らんとす。世人の心、滔々として物の形と情の慾と地の虚義とに迷溺す。



吾が大絃一度び天風にかなでられて神籟來らん。

---

天地悠々際限なし。無窮の時間は無窮の意、吾月明に對して偏へに之れを思ふ。吾宇宙に仰俯して此の生命を感ず。紛々たる人生も必ず神意あらむ。たゞ人情を信じて幽玄に應ず。

吾身を投じて救世に赴かんことを期す。神命の祐助を禱るのみ。

嗚呼然り、大信仰よ來れ。

否な先づ凡ての先人世界より脱出して此の身を自由なる自然のうちに投ぜんことを希ふ。否な。

吾實に日又日、自由の兒、自然の兒となりつゝあるなり。

吾、自然の兒となりて、人生、天地の時日に裸體を以て對するにつれて世人の不自然にして此の神聖なる世界を忘れ、自家の生命の更らに森嚴なることに盲目なるを知る也。

十六日。

人は自由の兒、自然の兒なり。

意識せらるゝ丈けの度に於て先づ十分これを意識せよ。然り吾實にしか感ずる也。

故に吾より以前に生れたる人がふみたる跡を模倣するはこれ愚の極なり。

吾が頭は直ちに無窮に天に接し、吾が眼は獨歩して此の蒼天明月に對す。吾が生は吾が生なり。個人の意義の妙奥はこれのみ。

故に生にして空なりと知らば、自殺す可し。是は最も自然的の行ひなり。決して前人の跡を見てあきらむるに及ばず。但し生の意に大信仰あらば決然其の上に立つ可し。また前人をまぬるに不及。

故に曰く信仰よ來れ。然らずんば吾常に模倣追跡の束縛を感ず。

凡て吾に在るもの去れ。富も（ありとすれば）去るべし。名も（ありとすれば）去るべし。希望も（ありとすれば）去れ。喜樂も（ありとすれば）去れ。妄想よ去れ、空想よ去れ、凡て去れ。愚なる智識よ去れ。

僞りたる誇よ去れ、凡て去るべし。

然り信仰ならぬもの去れ。吾を盲動せしめ、吾を束縛し、吾を充塞し、吾を迷はすものよ、去れ。

然る後、吾始めて眞の自然の兒となりて、信仰に充たされん。宇宙、眞理、神、愛、美、凡て吾に在りて空言なり。吾は疑ひもせず信じもせざる也。



爾眞に疑ふならば眠る能はざる可し。

爾眞に信ずる處あるならば、山をもうつすべし。

而して吾實に何んにてもあらぬなり。

愛、美、善、これ天地人間の心か。此の地上時間の生命は幻か。

「神聖」、「暗黑」、何れぞや。

吾は斷乎、斷々乎として神聖の愛と美と善とを信ぜんことを欲す。

吾が心は實にかく感ず。

嗚呼永遠窮みなき此の宇宙に此の人間！嗚呼誰れか「神聖」を疑はんとするぞ。

爾は神職を疑ふに非ず、未だ自家の生命を此の大自然のうちに見出さゞる也。

嗚呼憐れの人間よ。更らに光明、更らに信仰を指させ。

信仰、これ智識なり。吾實にしかく感ず。何となれば信仰は心の光を意味し、心の光は則ち智識なれば也。

天を仰いで呼ぶ、愛何處にある。美何處にある。善何處にある。光何處にある。

内に省みて叫ぶ、何處にあるぞ、凡て何處にあるぞ。

あるなるべし

吾をして山をうつす信仰に到らしめよ。

ダンテの信念は如何。ルーテルの信念は如何。省みて近代的妄想を見る、實にこれ水上の藁の如し。水上の藁船の盲動的舞踏よ、亡びよ。

天下の人、悉く無信仰に安んじ能ふとも吾は能はず。

凡て生れし凡ての人、これより生るべき全數の人、悉く無信仰に生き能ふとも吾は能はず。能はざるを誇る。

あらゆるもの吾より去れ。たゞ信仰よ來れ。これ命なり。地上の人、悉く望む處まち〳〵なり。

吾はたゞ信仰の火を希ふのみ。

十七日　日曜日。

吾が生命を感ず。感ずる者すなはちソールならずや。

然り生命の生命はソールなり。ソール則ち生命の自覺なり。

吾がソールを信ず。然りソールこれを命ず。否なソールかく云ふ。

十八日。



昨夜會堂にて感話す。

感話する所は信仰の決して言ひ易からぬ事、及び極力たゞ此の靈光を求む可き事。凡て吾が日々感ずる處なり。

本日德富氏に送書す。此の不幸なる繼子を如何にすべきてふ題にて、女子教育の事に就き三枚を書きて國民新聞に投ず。

本日種痘す。國元に荷物一個を送り返す。本日より午後五時よりの授業をはじむ。

---

近來月まことに美なり。昨夕は收二と共に蕃匠川の岸に立つて此の絶大の景を見、昨夕は獨り亦岸上に立ちて此の絶美の景に對しぬ。

絶美の景とは何ぞ。左の如し。

梅雨の候にて梅雨來らず、天常に浮雲、漠々たり。殊に元越山上には絶えず團々として黑雲飛散集合千萬の變化をいたす。夕暮西天の餘光水の如き時、月光東に登り來りて此の團々の雲間よりもれ、蕃匠の下流、暗影蕭條の處に射落す。凡て是れ蕭條のうち、一點の黃金色の光波起る。若し默々として此の景に對する時は、思はず涙下り、嗚呼美なる哉と呼ぶ也。

嗚呼吾爾を信ぜんと欲す。吾實に嘆美す。人間此の無始無終の自然のうちに何を求めんとはするぞ。

心を空うして爾の自然に對せよ。

吾たしかに美の靈妙を通じて神の宇宙を宮となさんとす。

嗚呼美しき月よ。爾は何ぞや。

吾何ぞや。

自然！美このうちに充つ。吾は自然の兒なり。

神聖なる關係なる哉。

嗚呼吾はたしかに一個の靈なり。靈は不死なり。

神聖者は美と善と愛の源なり。月には影あり。故に此の現象界は光暗交錯す。靈界はたゞ光明なり。

吾を動かす事實は何ぞ。

神の默示なり。然り美と善と愛の神の信仰來れ。



是れ靈の命なり。

十九日。

美を賞翫せしめよとは言はざるべし。否否、吾が望むは賞翫に非ずして、「神の美」を信ぜしめよ、吾が靈と此の宇宙の神の美との間に神聖なる關係を感ぜしめよと言ふ也。

曰く信仰よ來れ。美と善と愛との神の大信仰よ來れ。

吾が思は亂れ、吾が行は卑く、吾が心は荒れゆく。

何を求め、何を憂ひ、何を惑ふぞ。去れよ、これ悉く信仰なき塵世の聲なるのみ。

然り一線二線、神聖の樂光は吾がソールに落ち來るを覺ゆ。

二十日。

信仰なくんば感情と思想に統一なし。統一なし、故に折角の直覺も忽ち消え去る。月を見て美を感ぜざるに非ず。されど宇宙のうちに此の身此の心を信仰もて繫ぐ事なくしては、此の美感も一時の幻影のみ。衷心の活泉となる能はざるなり。靈の永久の滿足となる能はざる也。此れ吾が經驗を重ぬる處なり。

信仰は統一なり、自由なり、力なり。統一なき處に自由なし。

統一なき處に力なし。吾理に於てこれを知る。

而かも此の統一未だ吾に在りて甚だ朦朧なり。信仰なき者もたしかに靈の妙機を有す。故に好言し、多少の滿足を感ず。されど到底之れ不具なり。統一なし、故に力弱し。是れ世上に見る處。

信仰とは宇宙の心なる神の美と善と眞とを信ずるなり。

則ち宇宙的美、善、眞を信ずるなり。

二十一日。

吾が生命其のものを痛感する能はずしては到底宇宙の眞理の信仰に到達する能はざるべし。何となれば信仰とはたゞ生命の疑問の結果なればなり。生命其のものを此の宇宙のうちに痛感することなくしては生命の疑問起らざれば也。已に然り。此の如き心には信仰の必要なき也。彼は輕便なる器械を手製して日々を運び居れば也。

---

人類！此の地球の上に生滅する人類。無限の空間に在りては此の地球の如何に小なるよ。されど是人間生滅の世界なり。不思議なる哉人類の生存の事實。吾、人間として之を痛感せざるを得ざる也。宇宙は神聖ならずや。吾が生存は事實なり。

---

最初の事實に對する最眞の信念。

自由と力と希望と、偉人の源はこれのみ。

最初の事實とは何ぞや。

「此のホールなる、無窮なる宇宙に於ける此の生命」

これ吾れ人に取りて最初の事實に非ずや。

二十二日。

午前今井氏に與ふる文を作る。

初めて東京大地震の噂をきく。

海水浴を試む。

地の上の生命の事實は幻なり。天地に道なるものなくんば煩惱の鬼たるに過ぎず。自然は無情なる冷法則の冷體のみ。故に吾に眞の光なし。これ吾に眞の希望、自信、滿足なき所以なり？？？

否否、是れ客觀能批評の思想なるのみ。

吾、此の生命其のものゝ意味の高遠神聖を感ず。

二十三日。

午前今井君に與ふる書を作る。

午後海水浴を試む。

東京の諸氏に地震の見舞狀を出す。

二十四日　日曜日。

德富氏より端書來る。伊武雄氏より書狀來る。咯血病を病み歸省したりと。返書を認め了はりぬ。

父より來狀、吉見ハル孃より來狀。

東京の大地震の詳報、新聞紙にて來る。

晝飯には牛を煑て富永、尾間、平河の三氏を馳走す。午後相伴うて海水浴を試む。

曖昧は痲痺なり。靈の盲目なり。

吾、信ぜんことを欲し而して信じつゝあり。

二十五日。

文章は人間の大なる技なり、大なる寶なり。何となれば思想も感情もこれを通じてあらはれ、人



を敎へ人を導く之れに過ぐるなければ也。これ極めて陳腐なる言なりと雖も、吾昨今心から感ずる處なりとす。

二十六日。

吾に神なし。

嚴肅なる、偉靈なる、美なる、善なる神吾になし。

されど吾宇宙にこれあるを思ふ。未だ吾が心の眞の信仰のこゝに至らざる也。

吾たゞ善、美の神の信仰を求む。

---

今朝ウオーズウオルスのハイランドガールを讀む。

今井氏に與ふるの書を作る。

國民之友二百三十號來り、讀む。「一代の風雲と文學の題目」は讀んで感ぜざるに非ずと雖も、到底民友子流の言語に過ぎず。

民友子のオーソリティはジョンモルレー位のものに過ぎず。

---

海水浴をなす。

朝鮮の風雲益々危し。支那と吾が國との戰端今にも開かれんず樣子なり。

嗚呼世界人類の大勢は如何。

---

自然！これ空言に非ず。嗚呼決して空稱に非ず。

二十七日。

嗚呼見よ、蒼空の蒼々を、白雲の漠々を。水光山色の翠、これ夏日の美に非ずや。元越山上の雲霧の白光を見よ。

嗚呼自然！これ空言に非ず。

靜かにウォーズウォルスの句を唱せんことを希ふ。曰く

Why should we thus, with an untoward mind,
And in the weakness of humanity,
From natural wisdom turn our heart away,
To natural comfort shut our eyes ane ears,



And feeding on disquiet, thus disturb,
The calm of nature wish our restless thoughts.

然り、これ實に哲人の深慨幽懍する處のもの、嗚呼吾何を求め、何を追ふ。生命の動機にかられて行く先きは何處ぞや。

嗚呼此の玄妙不思議の天地、吾茲に在りて何を求め何を追ふぞ。曰く何を追求するぞ。靜かに小兒の赤心を披いて此の自然に對せよ。凡て染入の衣を脫して此の自然に對せよ。悠々として此の自然に對せよ。默々として此の自然に對せよ。

神何處にある！美何處にある。天地の大何道處にある。將に清き心の人は神を見む。千古の神言は吾を欺かず。

美在り、大道存す。たゞ心の清くて眼の明かならぬを嘆ず。

否否、これ愚なり。たゞ心を虛にして自然を見よ。

---

嗚呼吾、時々の電光的直感遂想を信ず。

一四、二四、竟に如何。

嗚呼、無罪（ノーセント）、義務、勇氣、美、善、永久の命、神の光榮、吾之を信ぜんことを欲す。
月、花、處女、少女、溪流、星、朝風、秋氣、山林、小兒、湖水、吾これを信ぜんことを欲す。

二十八日。

午前サルトル、レザルタス Natural Supernaturulism, の章を讀みぬ。
昨朝はウオーズウオルスの Ode Immortality の章を讀みたり。
共に深く感ずる處ありたれども、筆と口にあらはす能はざるものなり。哲人の觀る所、痛感する所、信念する處、蓋し深し。吾少しく其の消息を解す。
たゞ言ふ、吾をして信ぜしめよ。

---

海水浴を試む。
雲漠々、天茫々、美なる哉、人間の世界。否神の天地。

二十九日。

幻影よ去れ、諸々の幻影は實に我れ人の迷ふ處なり。
時の幻影、空間の幻影よ來れ、記憶の幻影よ去れ。



嗚呼茲に於てか問ふ、嘗て在りし吾が友は如何になりしぞ。
眞理を以て滿足するものは誰ぞ、幻影を追ふ勿れ。

---

## 七　月

二日。午後七時半記す。
一日は日曜日。此日午前、
坂本氏を去りて桂港の濱に宿を轉ず。蒸氣問屋なり。
一日三時間の授業となる。
國元より小包郵便到着、浴衣、かたびら、絽の羽織を送らる。
昨日港頭に水雷艇二艘來り、今日猶ほとゞまる。見物大變なり。
今日三回海水に浴す。
昨日午後富永、尾間等の諸氏來遊、昨夜教會に出席す。感話す。
炎熱甚だし、人力車にて登校す。

日清の關係日に迫る。内外の政界多事なり。海濱を散歩するは吾に新しき自然を見せしむ。

轉居まぎれにて、讀書と、沈思と、執筆の閑を得ず過ぎぬ。

たゞ一つの突然として吾が胸裡を往來する光あり。

曰く、「哲人は眞理に滿足す」てふネルソンの句の意なり。

時間、空間、名稱、習慣のイルージョンを去り得たりと假定せよ。然らばイルージョンならぬものは何ぞ。爾、何に滿足せんとはするぞ。

眞理！

三日。

事實！言ふ勿れ、輕ろ〳〵しく言ふ勿れ、事實と。此の意義は長し。人に依りて其の看取する處の事實異なり、時間に依りて其の注意する處の事實異る、其の異なる處を見て、其の人其の時代の精神を知るに足るなり。

四日。

午前ウオーズウオルスの一不死のオードを讀む。再讀三讀愈々其の妙諦を感得す。

彼は小兒のインノーセントを、及び其自由にして自然なる喜びを信じぬ。此の「信」を通じて靈



の不死を見たり。

轉居後何故に此の記少なきか。

讀むことゝ沈思すること少なければなり。

海に遊ぶこと多ければなり。海の景は美なり。

---

昨日長田氏西京に上る。蓋し秘行なり。少年の妄想は憐れむべし。

外交問題愈々急なり。

「實利實益」の迎代的妄想、愈々其の聲を高め來り、今や教育界も全く此のために支配せらるゝに至りぬ。

「今井氏に與ふ書」「竹取物語」「景時」の三編悉く中止の姿なり。筆とるの餘裕なきが如し。一言す「努力せよ」。

勞働は成程、神聖の法なり。

「信じて爲す」、これ余のクリードなり。

信ずるとは火の如き信仰を意味し、爲すとは神の活動の法を意味す。

「信じて爲せ」、余のすゝめなり。

人生は眞面目なり。

七日。

「今井君に與ふ書」を作る（昨日及一昨日）

カーライルのサルトルを讀む、（昨日）

愛と希望と嘆美と義務と、此の四綱立たずんば吾が心は倦憊せざらんと欲すとも得ず。

美なる、不思議なる、無限大の自然は吾を支配せずして、遲鈍なる、愚昧なる、怠惰なる、虚僞なる、周圍の關係は却て吾を支配せんとはするなり。

夕暮舟を海に泛べて漫航す。

嗚呼美と愛と、義務と希望との信仰よ來れ。「爲す」是れ實に人が此地上の義務の法に非ずや。さ



れど要するに凡ての法則は神聖者を信じて始めて其の力をあらはす。

吾神を視んことを希ふ。

嗚呼『神を視る』是れ吾の望む處なり。

今の吾は盲者なり。

神何處にある。心からして問へ、大なる答は來らん。

人は何を爲しつゝあるか。

日清事件は如何。嗚呼人間は此の天地間に何を爲さんとはする。

吾をして神の永遠のうちに勞働せしめよ。

神！永久！不死。然らば勞働は人間の法に非ずや。時間と空間とのイリユージョンを去りて、而して後吾は何を爲す。曰く働勞作爲す。之れ「今」の法なり。「今」の意味なり、「今」の心なり。

八日。

「吾今茲に在り」凡ては此のうちより來る。

神は「今」在り。今の裏面直ちに永遠に非ずや。幻なる哉。視る可からず、たゞ思ふ、これ「過去」なり。故に此の宇宙の現象はこれ幻なる哉。幻直ちに之れ實也。

吾人は流星の如し。光は暗黑のうちに在り。暗黑に向つて走れ。光、爾をめぐらん 然り、而して無窮の光に入らん。

吾人は動かざる可からず、——これ活動の眞理也。

嗚呼詩は信仰なり。

十日。

昨夜新月に乘じて舟を滿潮に泛べ放流す。

肅然として天地の無極の壯麗に對す。

行動十分宇宙に刻せられて「時間」之を消す能はず、一擧手一投足悉く神に達す。

人生は幽玄にして神秘なり。行動を現在に眞面目にせよ。吾これを信ず。



「時」！これ實に不思議の幻なり。

「昨日」は千年の昔と同じ。

信仰なる哉。「時」と「死」と「愚」と「薄弱」と悉く、これ不信の迷暗の對する處の幻なり

神を見よ。

昨日德富氏より來狀。

十一日。

吾尙ほ眞理を以て安ずる能はざる所以のもの如何。未だ眞理ならぬものに安んずれば也。人は何ものにか安んず。安んぜずんば眠ることすら出來ざるべし。

吾未だ眞理を信ぜざる也。否、眞理を見るに至らざる也。吾が眼は眞理より被はれ居るなり。

されど吾はたゞ吾が生命の聖を信ぜずんばあらず。故に何れの時か神の眞をみるの時あるを信ぜずんばあらず。

されど尙ほ記憶せよ、「今」なり。「今」を記憶せよ。

宇宙は不思議なり。故に人間は不思議なり。人間は不思議なり、故に人間の行爲、信仰、言語は

不思議なり。

ゲーテ、クリスト、カーライル、王陽明、ウォーズウォルスは不思議に非ざるか。

吾、直に不思議に非ざるか。吾の感情、歴史、此の熱情、これ不思議に非ざるか、嗚呼神よ。

故に吾神の前に個人の傳記を嚴かに學ばんと欲す。

これ人間の不思議を學ぶ也。則ち宇宙の不思議を學ぶなり。則ち神の不思議を學ぶ也。吾ウォーズウォルスてふ詩人（人間！）を考へて實に自然の不思議を更らに痛感せずんばあらず。

嗚呼ヒーロー！　また無名の俗人！　大なる不思議よ。

十二日。

個人樣々に此の宇宙に繫がれ各々其の命運に驅られて、夢の如く、疾風の如く、幻の如く此の地を經過す。

嗚呼吾！　此の吾！　不思議なる哉。人の一個！

凡ての個人を見よ、如何。

嗚呼人間の繫かる所は此の不思議の宇宙に非ずや。ォ、恐ろしくもある哉、此の大宇宙！われ人、此に現はれ玆に沒す。



昨日、太陽已に西に落ちて海島の遠影ほのかに夕陽を帶ぶる頃、家を出でゝ警報竿の一小丘に登りて遠望す。

暫くして小丘を斜に其の半腹に下り、ふと大入島の方を顧みたり。島と陸とによりてかこまれたる海面、湖水の如し。湖面寂々たり。島端を晩色のうちにかくす。

たゞ見る、大入島の横に當りて遠く、江峰の一塊、突として立つを見る。口言ふ可からず、筆記す可からず。これ壯麗にして幽冥なる自然の、人しれず其の秘密の美をもらす也。吾之を睇視して眼に一滴の涙をもつて立ちぬ。

カーライル何處に在る？　眞に何處にある！　彼何處にかゆきし。ウォーズウォルス何處にかある。凡て逝きし人々今如何。

此の自然！　嗚呼此の自然と逝きし此等の詩人達と今の關係は如何。

西行は如何、ショウペンハウエルは如何、吾が友は如何、吉川氏は如何。

嗚呼友よ、友よ、吾が愛の切なるに連りて爾の死の事實に打たる。

嗚呼默して、此の時間空間の無窮の自然と個人とを見よ。

十三日。

吾は未熟なり。實に吾は未だ何一ッとして熟したるものなし。成熟發達は人間が此の地上の自然の情なるに。不思議なる世界に不思議の命はかゝる。「如何に生活すべき」これ人の意味深き省問なると同時に

「人は如何に生活せしや」これまた人の深甚なる考究を要す。

「信じたり」是れ哲人達に冠する最簡の言葉なり。されど決してこれを以て其の生活を說明する能はざる也。

「生れて死するまで」彼は「如何に生活せしや」これなり。

「自然と人間」實に然り。決して分離して考ふる能はざる也。故に哲人は天が使したるものなり。

今！　神よ。

吾人の力は過去に不及。過ぎし事は如何ともなす能はず。夫れ然り。如何ともなし能はずとは言へ、過ぎし事も神の無窮エターニティの懷にありて消滅せざる事實なり。此の故に吾人は時々刻々自己を神の前に宣告しつゝ行くものと云ひて可也。吾人の動作は現在なり。

「現在」のみ吾なり。過去は神のうちに入る。

十四日。



あらためて問ふ、吾とは何ぞや。

英雄崇拜は眞理の信仰に出づ。

宇宙に大道眞神在ます。故に英雄は崇拜するに足る也。自我は空のみ。是カーライルの眞理に非ずや。

バーンス、ウオーズウオルス、ゲーテ、孔子、カーライル、クロンウエル、ボーロ、クリスト、マホメット、釋迦、ミルトン、シルレル等の文豪豫言者此の故に學ばざる可からず。彼等を學ぶは地上の神の默示を學ぶ也。天の心と地の人との如何に結合せられしかを學ぶなり。

嗚呼吾これを得たり。

故に人其のものこれ神のものに非ずや。

眞の精神は眞の神に通ず。眞の精神これ哲人の精神にぞある。哲人英雄を學ぶとは此の精神を學んで自家の精神となすにあり。此の精神は一つ。要するに神は一つ。

信仰を希ふ。永遠の光を見んことを欲す。

此の命は幻にして神は眞なり。

幻なる地上の吾は眞なる神に入る。信ぜよ、神は善なり愛なり、美なり、永久の命なり。

現象は幻なり、吾が魂は實にしか感ず。幻は眞の影なり。眞の神は凡てなり。

十六日　朝。

昨日は日曜日、午前中桐確太郎氏に書狀を出す。テニソンのイン、メモリアムを少しく讀みて多く思ひ付く。實に然り。愛！吾をして或人を愛せしめよ、凡ての人を愛し得るならば、如何に吾が靈の聲を聽き得べきぞ。曰く不死！之れ靈心の聲なり。

靈心の聲を信ぜよ。否、靈心の聲の外にして吾信ずべきものを知らず。

---

嗚呼神よ、神よ。

爾は聖なる希望を、愛するものゝ心に充たしめ給ふ。

吾、吾が去りにし友を回想悲戀すること愈々深くして不死なる眞理を愈々信ずるに至る！　嗚呼イン、メモリアムを高歌したる詩人よ。吾未だ爾の感想を味ふ能はずと雖も、いさゝか此の消息



を解しぬ。オ、爾！上古千百年の昔の偉人！愛を以てすれば今吾が傍に在り。

十七日。

昨夜同志の諸子と舟を明月に泛べて相談す。則ち上京に就ての策なり。

---

昨日今井氏より來狀。直ちに返書す。例の文章三枚を淸書して送りぬ。

---

朝鮮の事日に急なり。人間の事愈々意味あり。

十八日。

吾何を爲すべきか。これ昨日來吾が苦心する處なり。

政治か、宗教か、教育か、文學か、哲學か。

吾已に決せり。文學、而して美文、曰く小說、戲曲、好し。神よ。吾は未熟なる憐れのものなり。

たゞ宜しきに用ひ給へ。されど吾はたゞ如何にすれば尤も神に服ふかを思ふのみ。而して尤も自由なる法、吾に適する法を欲す。

政治！然りわれ政治を欲す。宗教！これ亦實に然り。教育、哲學、皆亦吾が熱血のわく處。

たゞ思ふ、吾が素養と境遇、尤も何れに適するかを。神よ、神よ、吾たゞ爾を仰ぐ。凡て爾に在り。詩人にもゆるし給へ。嗚呼默せんか。これ義務か。義務義務！吾文をとらん。

吾源流とならん。吾光明を受けしに之を反さん。神よこれ人間の希望に非ずや。

詩！詩！　吾魂にものあり。其の爆發の火口をもとむること急なり。

詩！詩！。

來れ大絃小琴。宇宙人生の神風吹き來て吾にあれ。嗚呼吾、神に在らん。

世よ！吾を品評せよ。何かあらん。

詩！詩！。吾詩を得て古と未來とに住み、凡ての人と交はらん。

嗚呼、詩を以て、夕陽の童歌を描きたるの故を以て、世より捨てられんか。吾喜んで彼の童と共に世の外に埋れん。

神！います。何かあらん、美と命と、神に在り。愛の在る處、神あり。

世！世とは何ぞ。死！死は來らん。

詩は吾の命なり。（午前）

嗚呼吾は何の故に此の平等の人間社會に在りて、平然として其の爲す可き部分を撰ぶ能はざるか。



極めて非なる哉、

人間のかゝる事に迷ふて苦まざることを得ざるとは。

吾南洋に生れしならば如何。吾は丸木船にのり廻りて、一生を送りたるなるべし。吾若し阿蘇山間の茅屋に生れしならば如何。應に危險なる噴火口に出入して硫黄採集に一生を送りたりしなるべし。

咄！人間の命運！吾は幻のみ。

嗚呼吾凡ての吾に同情す。吾は凡ての吾たらんことを希ふ。凡ての人は神の作り給ひしもの也。

此の故に吾、詩をとらん。美文をとらん。吾若し吾が筆に依りて吾ならぬ他の吾と共に呼吸し得るならば、如何に幸ぞ。

軍人、商賣、農夫、漁師、古人近人、詩人、哲學者、政治家、宗教家、ア、吾凡て詩神の交通に依りて爾等となりなん。

地上人間の命運。此の自然の無窮不思議。

オ、神よ。吾これを視てこれを語らん哉。

嗚呼吾一つの神と凡ての人とに住まん。

一つの神と凡ての人！ア、然り。　（午後）

---

嗚呼吾は吾がうちに迅雷の轟くをきく。（夜）

十九日。

昨日東京なる一番町教會より來狀あり。教會の現狀を報知せられ、夏日の炎暑を見舞はる。直ちに返書を差し出し置きぬ。

今朝國元より夏蜜柑到着せり。

---

事業勞働等の訓言は、倦憊したる心靈には何の力もなし。嗚呼吾たゞ吾が上帝の光と、命と、愛とを信ぜんと欲す。吾顧みて心底に迅雷を聞き、精神浩然として仙化する時あり。

吾は盲目なり。見る能はざるなり。

あゝ凡ての人よ。

ひとりの神よ。不思議の自然よ。

二十日。



時！　嗚呼不思議なる哉時。吾が友は逝きぬ。

時は、彼と吾とを隔て行くなり。彼は如何に成り行きしぞ。昨夜之を思ふて痛感し、今朝今また「時」を思ふて迷はんとす。

時。ミルトン何處にある。吾が樂しかりし少年の時代、何處に行きしぞ。過ぎしものは消えしか。

嗚呼、過ぎたるもの消滅したるか。

「時」と「行爲」とは……

嗚呼吾不知。

カーライル曰く「時」のイリユージョンを拋てと。

然り然り。されど如何にして拋つ可き。

戸外を眺めよ、吾かく幽思妄感俯仰沈想する時に當りて、人々はおのがじゞ罵りさわぎてある也。

嗚呼。人とは何ぞや。人とは何者ぞ。

---

時とは幻ならば、地上の生命は幻のみ。

「永遠」は時の外にあり。「行爲」は消えず。一舉動、われは宇宙にきざむ。然り永遠に刻むに非ず

や。

神よ信仰を與へよ。

たゞ信仰を。――嗚呼此の吾！凡ての吾、人類幻のみ。地球も何時か消えなん。消えよ。消えよ。

凡て形體持續の幻よ消えよ。自然！これ幻か。

神、凡て神に在り。

嗚呼神よ。

二十一日、

昨夜月を斷崖の上に迎へ、悠々たる蒼空の色、寂々たる海面の光、凡て吾をして瞑想して止まざらしむ。

今日水谷氏より端書來り、其の三角港に遊びしを報じぬ。返書し置きたり。

吾は到底瞑想を續けざる可らず。

故に吾は到底讀書思考の生涯を送らざる可らず。

故に吾は到底文筆を執る業をなさゞる可からず。

希臘の歴史、ゲーテの文學、シェクスピーアの技術。



哲人義士個々の傳記。自然。印度の思想。「時」「愛」「不死」紛々として吾が感想を激昂す。

二十二日。

思想、信仰、豈に此の朽つ可き肉體に包まれたる一種の風にして止まんや。

神の美と愛と希望と。之を永遠の靈なる眞理として呼吸せざる可らず。個人を學べ。歴史を知れ。

二十三日。

天の下、地の上、ソール、各國各時代、人は樣々の形をかりて、其の魂の聲を放ちぬ。其の口によりて、其の筆に依りて、而して實に其歴史によりて。嗚呼人、一つの神に凡ての人！

何故に美術はよろしきか。

吾之を得たり。左の如し。

想は意のまゝに情を動かすものに非ず。

深遠幽玄の神境は天來なり。

然るに人直ちに自然に對して此の神境を得、人も欲する時は却て神境來るものに非ず。

然るに靜に他人の想を通じて再現せられたる美術に對する時は、却て俗思のまどはすなく、想像の翼を張つて飄忽として神境に往來することを得る也。

術は吾人に不用意の際に美を示す。故に吾人は自由に其の美に打たるる也。

昨夜雨あり。今日雨あり。人再生の思あり、青稻蘇生の色あり。

昨夜涼風に乘じて宿處の主人等と語る。夜更けて雨をきゝつゝ一文を草しぬ。

二十四日。

暴風雨にして登校を止む。

放浪として一日を送りけり。

激浪を破つて游泳せり。

一休諸國物語を讀む。

---

過去現在未來！嗚呼不思議なるは時かな。人は時の海に浮沈す。此の海や底もなく際涯もなし。

時はイリユージョンに過ぎず。人間は全體なる宇宙の神の宮に在り。



過去の人を懐ふ故に神を懐ふ。

個人々々、深遠なる感想と別殊なる命運とを思ふ。

釋迦は如何、クリストは如何、ソクラテスは如何、若しくは秀吉は如何、將たまた大島尙三は如何、古川は如何。

夫れ個人を深感す、故に歴史を趣味す。

吾は吾自身已に奇異の思ひあり。

二十五日。

余が思想感情の世界が、其の絶えざる欝勃の聲を人知れず天地に向つて擧げつゝある時に、吾が周圍の世界は如何なる紛々の塵を擧けつゝあるか。

二十九日　日曜日。

吾が歸國の期は迫りぬ。

對淸事件にて開戰說紛々、朝野騷然たり。

二十七日の薄暮坂本氏にて馳走せられ、夜、日置、關谷、高橋の三氏吾が爲めに送別の宴を開かる。

夜やゝ更けて車に乘り歸宅。市街より桂港に至るの間里程殆んど一里。四方まことに寂然。車上

瞑想して人生の流轉を思ひ、老翁の事など思ひつゞく。

吾が職分は詩なり。吾は詩人の外、能はず。吾は偏へにたゞ天と人生とを思ひ、吾が凡ての感想は皆茲に歸着す。吾實に凡ての他の吾を懷ふ。懷ふて或は涙潸然。故にたゞ〳〵此の他の吾に同情をそゝがんために客觀の詩人たらんことを欲し、而してまた吾が胸間の信念欝勃たり。故にまた堂々立論、以てカーライル的文章を傳道の法に用ひんと思ふ。吾此の二途に迷ふ。迷ふを要せざる事なるに！

三十日。

昨日少年生徒九名を招きて晝飯を馳走し、半日を海水に遊び、少年等と共に面白く送りぬ。

夜教會に出席して感話す。

感話する處は此のタイムと人間の行爲との關係なり。

曰くタイムは幻のみ、吾人の行爲は實なり、宇宙はホールにして過去、未來、現在、凡てを包藏す。故に吾が一擧一動は宇宙に刻まれて存す。神は無窮の命にして吾が凡ては神に在りて現在なり。



紛々として吾俗に迷ふ。瞑想して此の生と神とを思ひ、反みて衝心す。神にあらずして眞の友は誰ぞや。

小我を捨てよ。嗚呼吾實に凡ての他の吾の地上の生命に同情す。神よ吾をして此の同情に適したる事業を執らしめ給へ。

## 八　月

五日。

八月一日佐伯を出發して二日の午後三時半頃三ケ濱に着し、其夜は茲に一泊せり。

薄暮松山を見物す。

出兵の光景を目擊せり。

三日の午前十一時三ケ濱を出發して午前四時廣島に着し、直ちに乘りかへて九時歸國す。

戰場の報しきりに到る。

ユーゴーのミゼラブルを讀み面白く感じぬ。

六日。

人默想する能はざる時は、不幸なる哉。

人實行する能はざる時は、不幸なる哉。

七日。

昨日朝吾家を出でゝ麻郷村なる吉見氏を訪問す。恰も此近在の村社祭禮に會す。河手の老母、小川の老母等來客あり。夜に入りては男客數名あり。

此夜一泊す。

今日も吉見と東の兩家にて日を消せり。

實にこれ別天地なり。

否これ正しく眞個普通の生活的人類の狀態なり。

茲には日月眞に長し。否、茲に住む人はタイムを感ずること少なし。

たゞ夕陽靜かなり。

茲に人類の歷史あることなし。否、茲に住む人は吾等の如き歷史變遷的感想あることなし。故に天地は彼等の天地なり。



茲は、眞に吾が瞑想のうちに形づくる世界とは自然に別天地をなす。

吾蟬聲を聽いてこれを感ず。

此の別天地を主觀して、更らにこれを想像中に客觀する彼に於ては、眞に人間生活なるものゝ深遠幽玄なるを感ぜずんばあらず。

此の別天地は吾よりして別天地のみ。普通の狀態なり。

而して其の普通の狀態中には、其の實宗教的、哲理的煩悶もあることなし。たゞ夫れ日々夜々生活を續けて生命に驅られつ生命を驅りつす。

夕陽のうち、嘆聲長し。祭日笑聲高し。池邊の蓮花、朝な々々開く。

勿論此の世界は是、肉あり血ある人間の世界のみ。

罪もあり、不幸もあり、不德もあり、暗黑もあり。嗚呼然り、然れどもこれ歷史家、宗教家、哲學者の世界にあらざるなり。

されど不思議なるは人心の作用なる哉。吾若し眞に此の別世界の人民ならむには、吾決して是等の言を知らざるもの也。是等の感を懷く能はざるもの也。

然らば吾は要するに此の世界を詩的に視たる也。

詩的に視る、是即ち主觀的客觀的視するの謂ひ也。
玆に始めて吾が靈に於て視る也。
オ、人類！

---

八日。

伴武雄氏及び富永德麿外三氏に書狀を發す。
今井氏に與ふる書七枚を淸書す。

---

佐伯出立前、數日以來、今日に至るまで十數日。淡々たる俗累に繫がれて、吾が胸底激昂の感慨は靜まりぬ。俗思俗情は吾を圍みぬ。炎々たる猛火消えて跡なし。
靜かに神に對し、徐ろに自然を視るの幽懷何處にか去りぬ。
時々の電光なきに非ざれども、要するに夫れ餘りに時々なり。
嗚呼願はくば吾に瞑想の時と場所とを與へよ。

---



嗚呼吾をして主宰者なる全能の神の愛と義と美とを信ぜしめよ。其の智を信ぜしめよ。而して凡ての他の吾を思はしめよ。然り然り。吾實に他の吾を思ひて禁ずる能はざる也。
嗚呼吾之を驗しぬ。神の信仰なくして豈に平安と希望あらむや。小我の束縛に在りて豈に自由同情の慰安あらむや。
嗚呼吾實に他の吾を思ふ。
此の吾を天地茫々のうちに見出すが故に他の吾をもしかす。
其れ然り。嗚呼然らば！吾他の吾を思ふて泣く。
蒸氣の釜をたきて此の炎暑に苦しむ人あるなり。
彈丸一發命を意はざるに隕す人あるなり。
布哇に出稼ぎしたる菊は如何。麻鄕村に流浪する篤は如何。
無邪氣なる小女吉見あやと春孃は如何。
嗚呼人は生れて活き、壯にして老い、老いて死す。是を外にして人の地上の生命あることなし。
嗚呼「吾」何ぞや。

十日。

事實は宇宙より消え去る者に非ず。
宇宙は全體なり。神は主宰なり。故に靈魂は不死なり。
これ吾が確信の一つなり。

---

昨日は今井君に與ふる書の第一節(二十枚)を淸書し了りて送付す。
怠惰！嗚呼吾程怠惰を惡む者あるか。吾怠惰ならむよりも死せむことを欲す。怠惰の時間は吾にありて毒杯の如し。夫れ斯の如し。而かも不思議なる哉、世にも吾程怠惰なる者あるか。吾殆ど怠惰に日を送る。而かも或者に魅せられたる如く、常に苦悶して安んずる能はざるなり。常に或る見るべからざる書籍を讀み居るが如し。
吾が精神は不斷の活動を爲す。然れども吾が精神は吾を勉學に靜止せしめず。

十一日。

デイトン氏註釋ハムレットを讀み始め序文を讀む。
伴武雄氏の境遇、及び富永德麿氏の家庭などより、一編の小說を案考中なり。
玆に青年あり。貧しきなかを繰り合せて、東京に留學したり。留學中父歿しぬ。學費の道殆んど



絕えたり。されど母は百方周旋して依然少しづゝの學費は送る事を得たり。
母と一人の妹とは、極めて貧しく暮せども、住む家屋はさすがに昔ながらの門構へなり。母は青年の成業をたゞ一つの希望と爲せり。彼女は青年卒業の曉は直ちに月給を得ることゝ心得居たり。
青年は文學に志しぬ。彼の思想は次第に世の普通より遠ざかりて遂に多少厭世思想を養成したり。
されど尙ほ彼は青年なり。母と妹とを思ひては斷腸せり。
其のうち彼は病を得たり。病は肺患なり。不起の病なり。
彼は遂に養生の爲め歸國せり。母は殆んど絕望せり。されど尙ほ母は愛の母なりき。
貧は次第に迫りぬ。而して青年の病も次第に迫りぬ。
青年は遂に狂せり。文稿を抱きて、狂死せり。吾ならぬ自然の不思議なる程、此の吾ぞ不思議なる。
人生！實に不思議なる哉。
山中の日月長くして生活いとゞ平知なり。されど人々互に生れつ死につす。人生は如何なる時、如何なる場所にも不思議なり。ピラミッドは過去の人代を回想せしむ。過去の人代何處にある。
否、吾が人代遂に何處にあるぞ。

實に願はしきは人生の不思議を明瞭に解したきことなり。
億萬の人此の願に死するとも、他の億萬何處として此の願を續けざらむ。これ最初の事實なれば
なり。
信仰なる哉、信仰は知る能はず。されど唯一の慰安なり。勇氣なり。希望也。
人生は不思議なる哉。

十三日。

昨日午睡半ばにして伴武雄氏來訪。
今朝伴氏歸宅す。昨夜は吾が家に一宿す。

---

人生に不思議を感ずるの情は屢々色々の事情にて減ぜられたりしが今や凡ての事實、事情、見聞
は悉く此の不思議の念を增さしむるのみ。
嗚呼人生、人間の天地に於ける生活、實に不思議なり。不思議と思ふ程愈々不思議にして不思議
と思はぬ人あるによりて益々不思議なり。

---



富永德磨氏より來狀、直ちに返書。
少年八名に一書を送る。岡崎、粟屋の兩氏にも亦。

---

此の生は到底幻にあらずや。
人類の過去茫遠として知る可らず。人類の未來も亦然り。豈に一個人と云はむや。嗚呼此の人類
の吾、これ何ぞや。

十五日。

人は境遇の支配を免るゝ能はざるなり。
到底人は神ならぬ魔力の支配の下にあるなり。
嗚呼、人生は不思議なる哉、血涙なる哉。

---

盂蘭盆に際す。昨夜坪井町に盆をどりを見物す。
昨日今日ハムレットを讀む。

---

見よ見よ、彼等は踊りて暮すなり。彼等の世界は一村落、一市街なり。

今夜盆をどりを見物す。

嗚呼斯くの如くして幾多の時代は經過せり。

人生は轉換したり。

嗚呼人類夫れ自身不思議なる哉。

嗚呼全智全能の上帝、愛は君のものなり。

永遠は君のものなり。

人生！　美、愛、戀、善。

十六日。

人生は不思議なる哉、嗚呼人生は不思議なる哉。

イエス・クリストあるが故に不思議なり。カーライルあるが故に不思議なり。而して盆をどりに夜を明かす人あるが故に更らに不思議なり。たゞ〳〵不思議といふ外あらざらしむ。

嗚呼此の不思議を解くよしもがな、とくよしもがな。

十七日。

昨夜岸の下の盆踊りありて、夜更けまで、村女達のはねくり廻るを見物したり。

朝、忽ちにして午後、而して夜。此頃の一日は矢の如く空過す。

昨日午後一時少し前、收二と共に琴石山麓の山家點在せる邊りを散歩す。溪流に沿うて山路を辿り、松林に入りて山腹を横ぎる。サコンタを止めて水に浴し、路傍に沿うて棗を盗む。山寺に入りて僧の眠りを驚かし、犬に吠えられて笑つて石を投げつく。田をめぐり、森を望み、遙かに海水の漂渺たるを眺めなどして、盛夏日中思ふまゝ吾が愛する夏を樂みたり。

---

嗚呼普通の民を見よ。彼等は樂しげに暮すなり。而して吾は空想妄想に苦むなり。彼等は心から樂しみて踊りを待ち、而して思ふ存分にこれを樂しく經過したり。吾は然らず。吾に樂しみあることなし。夏日、樂しい哉。されど彼等は無意識の中に之を樂しめども、吾は何もかも思考の中になげこむ。

嗚呼われゲーテを讀み、カーライルを讀み、ウオーズウオルスを讀み得るは不幸なるか。讀書生活は不幸なるか。智識は不幸なるか。嗚呼「詩と哲學」の人は愚者なるなからむや。

嗚呼信仰なき人は此の言をなす。信仰なくして思考の人となりし者はのろはれたるなり。吾は愚

者中の愚者なり。吾は樂しきを知らず。幸福ならず。吾は戀人を有せず。吾は寧ろ戀の幻中に死せむことを欲す。

吾は、嗚呼吾は斷じて幸福ならず。見よ、玆に其處に愚なる學の國の小兒あり。

人生は不思議なるが故に、吾此の不思議を痛感するが故に、不思議にも此の重くるしき生命を荷ひ居るものなり。

不思議なる人生は、吾に勝手の幻影を描くを許すが故に、永遠は時の裏面にあり。

吾たゞ永遠を望んで此の「時」の國に忍ぶ也。

時よ忽乎と飛べ。吾と此の時代の凡ての人とを墓中に置け。

吾は衆と共に、永遠の國に住まんことを希ふ。

嗚呼、嗚呼、凡てこれ呪はれたるものゝ言に非ずや。

然り。吾は此の如く筆記すれども、吾は何も知らざるなり。

---

**ハムレットの第一齣を讀了りぬ。**

無窮の時間、無窮の空間に包まれたる人生は實に不思議なり。無窮の時間と空間が人間の思想に



不思議と認めらるゝ限りは人生は不思議なるなり。

嗚呼タイム。凡てのもの此の永劫の海に浮沈生滅す。

嗚呼幻なる哉、時！　昨日昨夜何處にある。凡ての過去何處にある。

吾！これ幻なる哉。嗚呼吾の生存を感ず。

此の現存する吾！此のタイム。此の無窮！知らず、相關するの深意は如何。

此の不思議に光明を投ぐるものは何ぞや。吾之を欲す。實に之を欲す。

十八日。

嗚呼日清の間に戰爭は起りぬ。

東洋に於ける二大國民は殆ど生死の衝突を始めたり。

血を異境の土神に供する兵士あり。涙を茅屋の隅に呑む寡婦あり。嗚呼戰爭は開かれたり。

知らず歴史の眞意、上帝の攝理の存する處如何。吾知らず、吾知らず、たゞ上帝の智識を信ず。

歴史の眞意、上帝の攝理の存する處如何。吾知らず、吾知らず、たゞ上帝の智識を信ず。

吾は此の國民のために必ず深遠雄大の聲を放たざる可からず。これわれの義務に非ずや。

嗚呼吾等同時代の人間！百年の後皆墓中の人たり。

ウォートル ローの英雄だち今何處にかある。
カーライルも何處にある。
嗚呼皇天！無窮無限の旻天！
皇天！皇天！希くは吾に心底透徹する光明をなげ給へ。吾反射せむ、吾反射せむ。
人は動く。見よ人は動く。國民は叫ぶ。民は戰ふ。
而して人は踊り、人は笑ひ、人は生活す。何ぞや。何ぞや。
人類！此の無窮に包まれたる人類！爾の生存はこれ何ぞや。吾存す。
嗚呼此の如く呼吸して此く感情を馳せ、思考を馳せ、此くの如く此くの如き天地に生存す。而して此の天地のうちに死して土に入る。
皇天！此の天火の不思議をとき給へ。此の永劫の不思議をとき給へ！知らず、吾知る能はず。信ぜよと吾は叫ばん。浮動して輝轉する此の感情！嗚呼吾は怒り吾は泣き吾は火を呑み水をくゞり地を蹴る。
來れ無形のあるもの。語れ過去と將來にすむ無形のあるもの。
幻か幻か。皇天！凡ての幻か。戰爭も幻か。



現在！神よ、救ひ給へ。此の苦悶を。
嗚呼神よ、吾は此の聖なる寶を信じ此の生存を確信す。否な吾生存す。
國民人類生存す。これ幻にして神の事實なり。不思議なる事實なり。
然り實に幻の如き事實なり。
神よ御身が投げ給ひし人の心の光を信ず。嗚呼人の情の光を信ず。永遠の命を信ず。萬法の御心を信ず。
嗚呼皇天！此の一身一靈を爾の光榮ある用に供へ給へ。吾此の用を信ず。義務！と吾は叫ばん。
神聖なる永遠の神の宮に天の光を享く。
皇天、感謝す。吾に希望あり、慰安あり、勇氣あり、活動あり、滿心の元氣あり。
嗚呼、吾は知る能はず、故に吾は信仰に立ちて戰士の如くに進まん。
嗚呼此の一身一靈の命運は、凡ての人類の命運に非ずや。人！決して差異なし。
一身一靈の生命其のもの吾口言ふ能はざる神聖と不思議とまた恐怖とを感ず。
二十二日。
十九日は河手忠氏より端書來り來遊を促す。すなはち大野村にゆく。此の夜一時過まで談話す。

河手氏問ふ、宗教の必要とは何を意味するかと。吾これに答へて人生の不思議を語る。二十日は伴武雄氏の宅に暮しぬ。其夜一泊。二十一日は伴氏と共に廐郷村にゆき、余は吉見を訪問す。女主人不在。薄暮われ歸宅せんとす、たま〳〵河手氏來り、女主人も亦歸宅す。則ち一泊す。

本日は吉見氏の宅にて伴氏布浦氏等と語り、午後六時すぎ漸く歸宅したり。

不在中、今井、富永、大久保氏等より來狀。

德富氏より端書來る。

伴武雄氏の宅にて早稻田文學の一册を繙きしに、たま〳〵吾が友金子馬治氏がものしたる「新文豪」てふ文章ありて、其のうちに米國詩人ホイツトマンの詩想を紹介せり。吾之を讀みていたく感じぬ。

たしかに吾が意を得たるもの也。上京後は金子氏に面して此の詩人に就き更らに學ぶ處あらんとぞ思ふ。

人生は神聖なる不思議なり。かく感じ得るは幸なる哉。而して哲人詩聖悉く其の精神に於て此くの如きこれ也。

二十三日。



午前九時十七分筆をとる。

久しぶりにて曇天雨模樣、少しく降りてまた止みぬ。降れかしと人々祈るものを、降るなるべし。

過ぐる四日外出の間の事を猶ほ憶ひ起しては茲に書きつけ置く。

昨日午後、綾孃（八才）春孃（十二才）を伴れて八海川の潮さす處の深みに游泳せんとて出でゆき、面白き無邪氣なる一時間を愛しぬ。

一昨日の午後、日已に西に傾きて野に夕陽みつる時獨り吉見氏を出でゝ、近傍の山路をたどり野邊を行き、遂に高伊山に登りぬ。三年の昔茲に多感の月日を送りし事もありきと思へば、また多少の感なきに非ず。女郎花を摘みて歸り、一束にして吉見氏の池にさし置きたるが忘れて歸宅したり。

吉見の庭に白萩咲き亂れ居たり。

河手氏の庭の密柑累々として實り居たり。

山より落つる用水の筧の水へりておつる音かすかになりぬ。蜜亦實りて已に半ば熟し居たり。葉鷄頭の葉己に其の美しき線をかざせり。柿も今年は今より後風さへ吹かねば豐かなるべしと思はる。嘗て餘りに朽ちたりし湯殿新築せられぬ。

せつ女今年は二才（去年の正月誕生）、已に言語を解して亦自から廻らぬ舌にて何か言ふ。小兒は觀察すればする程愈々面白し。小兒は如何なる小兒も實に天使なり。實に天使なり。決して無智と言ふ勿れ。

哀れ氣の毒なるは伴君の母びとにぞある。聞く、伴氏に嫁して間もなく破産し其の後夫婦非常の節儉をして漸く産をなしたるに復も夫なる人すなはち武雄君の父なる人の突然なる疾に斃れて後に負債山の如く遺されたり。武雄君の留學資は兄なる良輔氏が小學校の教師をつとめて得たる俸給をさき、また親族より幾分の補助を受けて僅かにこれを給したりし也とぞ。然るに今や武雄君將に專門學校文學科の業を卒へんとして遂に肺疾にかゝりぬ。母びとの情如何にぞや。あゝ此の哀れの母の心いかにぞや。吾母なる人を見るに其の面色土の如く言ふ可からざる憂愁の色を帶びたり。河手氏曰く此の婦人の憂色は今に然り、以前より然りと。然らば今や憂の上に憂を加へて更に深く色にこそいでしならめ。嗚呼世には斷腸の人多し。武雄君と語るうち、ふと心に思へらく、われ今、此の友此の病める青年と語れども、此の人は殆んど不治の病魔に其の爪端の一角を打ち込まれたる事ゆゑ、何時生別の外の悲慘なる別れを告ぐる事も或は一兩年のうちにあるを保せられず。



然らば此の語る吾が友今は生くと雖もこれ土となる可きもの也。かく感ずる時、友愛生死さまざまの深き魂の激動起りたり。

志ある青年の病みて貧しき程哀れなるはなし。嗚呼青年！其の前途の希望をもつて其の熱血の奔流を懷きて、すなはち墓中に入る。吾泣かざらんと欲しても得ず。

吉見春孃は地上の人にあらざるが如し。山林の女神特に野花の露をあつめて此の少女の胸に吹き込みたりと見ゆ。玲瓏として玉の如く、決して塵間のものに非ず。妹なる綾孃に對して親切友愛注意周到なる、實に傍より見ても涙のこぼるゝ程なり。曾て僞を知らず、曾て飾を知らず、曾て虚榮を知らず。

綾孃今年の春より始めて小學校に通ふ事となりぬ。校舍は山路をたどりて十數丁の處に在り。春孃よく妹をつれていたはりはげましてゆく。春孃今年高等二年となりぬ。席順は常に一二の間に在り。吾傍より此の少女が事を務むる樣を見るに常に靜平にして常に主一なり。成就せざれば止まず。自から學ぶ時に當りては傍に姉と妹とが戯戯するも更らに頓着せざる也。

二十四日。

「吾が知る少女の事を記す」てふ文を草す。家庭雜誌に投ぜんとてなり。吉見春孃の事を記したる

もの也。

海水に浴す。

薄暮より今十一時四十八分に至るまでの吾が時間を空談に費す。

吾は馬鹿氣たる境遇に適せず。

二十五日。

二十六日。

昨日はクロンウエルの傳を讀みたり。これ竹越與三郎氏のものしたるもの、少しも面白からず。クロンウエルの人物少しも活動せざる也。昨夜やゝふけて、吉見の春孃、友と稱する人に伴はれて來る。何事にやと尋ねければ廣島に行くなりと答ふ。船の來るは未だ間もあるゆゑ茲にて少しく待てと止めて暫時語る。亦自ら角屋まで送りたり。二十三日の記にもある如く吾春孃綾孃を伴ひて八海川に游泳したる時に、春孃足が痛むとて吾に太股を示したり。股膨れ居たり。吾ひそかに其尋常の痛みにあらざる可きを知り、家に歸らば直ちに彼女の母に告げむと約しぬ。而して忘れたり。故に吾家に歸りたる後はがきを投じて見舞を言ひやりぬ。春孃の語には其後二宮てふ醫士に見せたるに放棄し置く時は風毒てふものになるとか。則ち友の廣島に行くを幸ひ、同伴して病



院の醫士の診察を求むるに決したりとか。

吾此の少女の安康を祈るなり。

---

昨日水谷氏に返書す。家庭雜誌に投稿す。序に塚越氏に送書す。石崎ため氏に訪問の難きを報ず。

---

今日國民の友來り、夏期附錄あり。

流竄錄。靴師。司馬江漢の世界觀等を讀みぬ。

---

吾が信仰は煙なり。火に非ず。

吾は信仰を叫びたる熱心の吾を今井氏に暴露したる如く、此の極めて馬鹿氣たる吾をも示さゞるべからず。吾は冷然として高處獨行する能はざるなり。

高尚、正義、剛健てふが如きは、吾にありて空言なり。

吾惡を惡行せず。されど義の人、愛の人、信仰の人、眞に希望ある人として男子の如く立つ能はず。否な、反省する時は實に其の如きを認む。

嗚呼、人生の不思議天地の玄妙なることを感ずる時に當りて、此の心魂を衝動せしむるものは何ぞや。涙と共に瞑想默契の慰安に至らしむるものは何ぞや。變愛もこれなるべし。されど吾未だ其の眞消息を解せず。美景は是なり。歌聲はこれなり。

---

吾未だ忍耐の眞味を知らず。

不思議なる哉吾！吾は吾に最初最大の不思議に非ずや。

---

人生の不思議天地の不思議、吾其のものゝ不思議を感ずる時に於ては「他の吾」を痛感せざらんと欲するも得ず。

二十七日。

人は光なり、人生の幽暗をてらす光これを何處にか求むる。曰くこれを人物に求めよ。余はこれを信ず、益々これを信ず。

人と天との係はる處を見よ。爾は人なり。而して彼の大人は人なり。而して人は此の天地のもの也。



嗚呼人！吾は此の故に曰ふ、人物を見よ。これ光を見る也。

吾何故に聖經を讀むか。イエスクリストを見んとてなり。

爾何を學ばんとはするぞ。此の不思議なる人が此の不思議なる天地に於ける全體の意味を學ぶの外何かある。

義務の猛氣となり勞作の耐忍となるに終らずんば爾の信仰といふはこれ煙なり。火に非ずと知れ。

此の聖なる世界に在りて何故に不滿なるや。海濱の白沙に横はりつゝ悠々の天と茫々の海とを眺めて感じぬ。

亦感じぬ。青年漸く壯年に及び、玆に前途の永きに似て極めて短かく、人生短かしの嘆、中心より涌き來たるに及びて、はじめて人生其ものの玄妙無量を感ぜずんばあらず。

吾は宇宙に怪しくきざまれつゝあるなり。眞に不思議を極感ぜずんば決して眞に信仰は出來ざる也。

二十九日。

無限てふ不思議に包まれたる人生は如何に思ふとも不思議たるをまぬかれざる也。

天地萬有も不思議なり。生死の法も不思議なり。否、日々の普通の生活も不思議なり。

吾は不思議を感ずる事愈々痛くして、神聖の感次第に加はる。樂天か厭世か吾これを知らず。只生命存在其れ自身を神聖に感せずんばあらず。

吾が年齢も已に二十四才、一日一年は矢の如くゆく。未だ生命のうち眞に無窮の命を痛感する能はざるが故に、吾が前途の次第に切迫するが如くに感ず。不變永久の絶對なる神吾に在りて甚だ不確なり。一秒一秒そこに神あるを感ずる能はず。

されど吾は遂に進歩す。

三十日。

昨日今井忠治氏より來狀。佐伯なる少年生徒の中より來狀。

吉見氏より來狀。今井氏は特に「富山行」を送る。一昨日攻壘てふ小軍歌を作りて讀賣新聞に投ず。

三十一日。

何故に妄想の宮に住むぞや。

直ちに此の天地、吾を圍む天地には住まざるか。

事業功業の感念をして吾を此の宇宙に重く繫がしめんよりは「生活」其のもの、只これ生活そのなるも)神聖視して幸福滿足平希和望に送らざる可からざる也。

故に平民無名山間の生活をも吾はこれを神聖に感ぜざる可からず。此の天地に直ちに住まば足る。

妄想の宮より出でよ。

人生生活の眞趣はこれなり。

茲に於てか吾凡てのソールの凡ての生活を重ぜんとす。



## 九月

一日。

本日午前伊保の庄なる黑島に散歩せり。

黑島とは名のみにて、今日は島に非ず、一小半島なり。されど曾て島なりし事明かなり。松樹茂り斷巖白砂の風景を兼ねて夏日の游泳には最好の處なり。

風景絶佳、面白き散歩なりき。歸りは小舟の便をかる。

何故に直ちに此の神聖美麗なる天地にすまざる。これ吾が痛感する處なり。

神に依りて、故に神のために。

「怠慢」。これは最後の悪徳なることを知る也。
經驗とは何ぞや。
人間の過去は上帝の現在なり。
吾は沈思瞑想の時を愛す。吾は沈思瞑想するを得ば幸福なり。活動！「沈思瞑想は、靈なる活動ならずや。

二日。
佐伯より電報來りぬ。彼等は出立したる也。明夜は吾も上京の途に上るべし。遲くとも明後夜は。
吾心の中に期して曰く、已に是等の青年を率ゆ、如何なる事ありとも失望的言行ある可からず。
如何なる事ありとも雖も薄志弱行なる可からず。嗚呼神よ。大なる全能なる神よ、常に汝の前に
在りて是等青年を率ひしめ給へ。
彼等をして剛健なる義人たらしめ給へ。
嗚呼吾をして人を愛せしめ給へ。神よ。

四日。
汽船中にて此の筆を執る。



昨夜岸の下港に乘船して今朝宇品港に着し、宇品に於て富永、山口の兩氏と會し、再び乘船して
大阪に向つて發す。
今は午前十時其渡航中に在り。
同行約束者の中、尾間、並河の兩氏は故ありて吾等におくれたり。
昨朝伴武雄氏來遊し終日滯在、岸の下港まで見送られて、吾は氏と埠頭に別れ、氏は吾が家に一
泊の都合にて去る。
昨夜吾を送りたる者十數名。
送るものゝうち女子二人あり、嗚呼他生の緣！
一樹の緣は永久の涙、一蒼の天は無窮の色。一昨夜吾此の二女に關して幽愁の涙をふるひぬ。事
實は左の如し。
吾が父母、吾が兄弟の未だ佐伯より歸省せざる殆んど一箇月の前姫田なる家を去りて、柳井町を
少しく隔たりて海に近き宮本てふ處に轉居したり。此の借屋の本家は隣家の餅屋なり。
此の餅屋は宮本の三角餅とて名物なり。
此の餅屋は主人夫婦に老母一人、他に二男二女ありて七人の家族をなす。されど此の二男二女共

に主人夫婦の子女に非ずして悉く娚姪に當るものなり。然るに此の二男二女も亦兄弟姉妹には非ず。二男は兄弟なり。長は二十才ばかり次は十五才。二女はいとこ同志なり。一女は岩と稱して十九才、一女はきぬと稱して十六歳。共に此の家族に加はりて勞働するもの、其の父母たちは或は死し或は破産し、彼女等は不運のうちに叔父叔母の世話を受けつゝあるもの也。

此の混合家族は不思議なる程好人物の集合なり。彼等も義理的關係なれども、血緣的同感を有し互に愛交す。殊に主人夫婦はめづらしき好人物、主人は品格ある四十前後の丈夫なり。一家族悉く勉勵なる勞働者、一人の老母を除きて。

此の如き家族を本家とし隣家となす事ゆゑ、吾たちまち親しき交を結びぬ。夏の夕暮吾は談話の主人となりぬ。盆踊は二女と共に見物したり。

若き男女の間には言ふに言はれぬ緣を來たすものなり。其は明白なる擧動に現はれずして一言のうち一笑の際に己に永久の涙を價ひするの緣あらしむ。

吾此の二女等と一度別れんか、決して何時遇ふとも期し難き互の境遇なる事を知れり。

天地悠々として轉じ、人生日月と共に逝く。相遇ふ何の緣、相知る何の緣、相思ふ何の緣、吾は彼女たちの戀愛の呼吸をさとりぬ。嗚呼これ可憐の極に非ずや。



せめてはと思ひ、ハンケチ二枚を求めてひそかに彼女等に贈らんものと、一昨夜其の機をまちぬ。夜更けて機失す。獨り燈下に人生逢遭の緣、愛戀の情を思ひ、悠々の天地を感じ來れば幽愁の涙止めんと欲して得ず。此夜風荒くして雨戸笛の如く響く。これ悲しき夜なり。

吾己に此の二女に別れぬ。哀れのソールよ。永久に榮えよ。神よ彼等を守り給へ。神の宮に永久に生きん。

昨日午後に及びて石崎ため孃來訪す。自らの身の上の不如意を訴へ、且姉なる霜氏の目下の不幸を語る。此の世は涙を飲みて生くる處なるが如し。

吾この嬢のため、上京の上は盡力して見んと約束せり。

---

人々要するに薄弱なり。彼等は神の力をたのまずして世の波におのゝく。吾剛健を德とする益々蔑だしきを加へぬ。

導びくもの救ふものは剛健ならざる可からず。

剛健、うき世の波の怒を嘲るに足る剛健は如何にして來るべき。

吾これを知る。

宇宙は不磨の頁を有す。曰く時間。吾人は自ら此のページに宣告的傳記を草しつゝゆく。
神の判斷はこれに加はるとも知るか知らぬかのうちに。
見よ、見よ。人生は眞に不思議なり。

---

午後五時再び筆を取る。
人生愈々經驗して愈々不思議と感ずる也。近來吾が見聞實踐したる處吾が心に映じて互に相對照し來るが故に、宇宙の不思議(ミステリー)の愈々幽玄神怪の色彩を帶び來るを覺ゆ。

六日。
東京の旅館に於て此の筆を執る。
五日午前三時大阪川口に着船し、それより直ちに待合所に到りて、夜の明くるまで休息したり。
夜明けて人力車にのり、中島なる旅人宿に投じ、茲にて朝食を了り、直ちに四人相伴ふて大阪城を見物せり。
其日の午後一時四分發の上り汽車に乘じて彦根まで來りて茲に下車し、大久保氏を訪ひ氏に誘はれて彦根城を再見す。蓋し此のたびは收二等のためなり。



六日即、今日の午前三時上車、東上の途につき、午後六時半着す。雨漠々。人々を導きて銀座街頭を歩み歸り之を記す。（十時三十五分）

七日　雨漠々。
本日午前、吾獨り車にて麹町に來り、今井氏を訪ひたれども不在なりし故、下宿屋を定めて歸館し直ちに三人を伴ふて茲に移轉す。茲とは麹町三番町九番地なり。富永氏を伴ふて神田を散歩す。
夜再び今井氏を訪ひ、久しぶりにて談話面白かりし。

---

吾が一身一空の大宇宙に繫がれ居るを忘るゝ勿れ。
茫々として其れたゞ生活の道に迷ふ。人間の社會は實に紛々たるものなり。

八日。
今朝只今德富猪一郎氏を訪問したれども不在なりし故歸宅して直ちに此の筆を採る。人生は不思議なる哉。
見よ見よ、吾も亦生活の道に迷はんとはするなり。紛々として大都の生活を見よ。

紛々茫々として宇宙暗し。たゞ信仰あらしめよ。
吾が在る處此の無窮不思議の宇宙にして而して吾が住む處は此の紛々たる人の世なり。嗚呼道は何處に在る。光何處にある。希望何處に在る。吾何を苦心するぞ。何故に苦心するぞ。

神は求むる人に其の存在の確信を與ふ。

九日。
嗚呼人間の生活。人間の歴史。
都會人間の生活は能くも人間競爭の生活を描きたるもの哉。
こゝには自然の美もなし。たゞ衣食住あるのみ。たゞ虚榮あるのみ。深情なるラブもあることなし。
政治家、新聞記者たち、日夜苦心奔走せり。
これ今日の事なり。嗚呼人間の歴史とは日々の響のみ。
不思議なる哉、人生！
觀察見聞すればする程不思議をますのみ。



十日。
吾が身自身が則ち人生の不思議其のものなるを感ず。吾が身自身の見聞、遭遇、經驗は悉く悉く吾が心に再現せられて、煩悶瞑想感慨の種となる。

昨日午後、牛込を散歩し、貸家を探す。
昨夜亦德富氏を訪ひたるに不在。
今日午後金子馬治氏來る。伴ひて氏が宅に行く。
今夜中桐氏に書狀を出す。

今日しがらみ草紙を購求してエルテルのわづらひを讀みぬ。

十九世紀の信仰の粹は「宇宙は無極無限の進歩なり」てふ句にありと金子は言へり。

吾は感慨の中に在り。

十二日。

十二日は一時間を餘すのみ。

吾等六人は昨日を以て玆則ち牛込南榎町に轉居したり。パンを以て自炊の生活を始めたり。今日は昨夜の暴風に引きかへて晴天白日なりき。德富氏より電報來り、六時社にてまつと申し來りしかば直に車を飛ばして到れば德富氏未だあらず、漸くして來る。曰く直にこれより社員一同と共に馳走すべしと某西洋料理屋に導かる。

滿室社員なり。

今夜の光景及び吾が感想は、明日の記に書くべし。德富氏と相談の上、兎も角も民友社に出席して手傳ふ事に致しぬ。

氏は明朝の一番汽車にて廣島に向けて出發すべし。

久しぶりの明月、山間の茅屋に在りて眺むるを吾は幸とすべし。都の月は虛榮の月となるべき恐あれば。

十三日。

冷然たる批評よりすれば、今や吾が靈は何となく其光明の力を失ひたる心地する也。



されど然らず、吾は進みつゝあるなり。

嗚呼此の我。此の人生。吾は徒らに激昂す。吾は希望なき道を歩みつつあるが如く、又或者に鼓せられて進みつゝあるが如し。

吾は昨夜新聞記者たちの意氣軒昂の情況を見たり。彼等は脇目にも活世界に躍りつゝあるが如く見ゆ。彼等は全世界の歴史が日清戰爭に關するものありとして論じ、全力をこめてはたらく可しと誓へり。

活氣、殺氣、和氣、室内に滿ちぬ。

德富氏は立ちて演說したり。

吾が血は燃え立ちぬ。活世界！　活世界！　大丈夫將に大に手腕を振ふの天地！　當時當代、今玆ぞと思ひぬ。かく思ふ時に、上帝の眞理と、人生の意義と、活世界の活動とが互に相和せられたる如くに感じぬ。火の如き感情は泉の如く、吾が心に流れ込みぬ。

ガス燈の光は燦として室内晝の如し。吾が前面に倚るものは人見市太郎氏。山路愛山氏。中村修一氏等なり。

吾が左に山川氏を隔てゝ直ちに德富氏あり、德富氏の左に金子斬馬氏あり、其左に竹越與三郎氏

あり。竹越氏に對して久保田金僊氏あり。社員はのこらず集められ、其數恐らく三四十人ありしならむ。

談笑の際階を昇りて入り來るものあり。

拍手を以て、人々之を迎へぬ。顧みれば、これ深井英吾氏なり。面目秀麗身に黑の質素なる洋服をまとひぬ。

是れ實に年少氣鋭前途有望の好青年。

彼は今夜送別せらるゝもの一人なり。

彼は聖輩に先だちて西、廣島を指して發途し、道々の光景を報ぜんとするもの、今夜九時五十分の汽車に乘り込まんとす。

吾は彼を羨ましく思ひぬ。彼は中村修一氏の右に座を占めたるが故に余と斜めに相對せり。余は彼を熟視したり。彼はそは〳〵として足をふり體を動かしなどして其のとがりたる鼻とキョロ〳〵したる眼とを敏捷に回轉しつゝ居たり。

信なる中村修一氏！めづらしくもなき修一氏はめづらしくもなき無頓着、沈默にしてとぼけたるが如き顏つきにて始終皿のうちのみ見つめ居たり。



宗教！信仰！ウォー　ウォルス、此の如き題目は此の如き室内には冷笑し倒されんず光景なり。

宴散じて家を出づれば街頭車馬の音は將に日本の中心京橋市街の喧轟なり。月皎々として天上にかゝりぬ。

民友社樓上、客散じて余と德富氏と愛山君と金子と湯淺氏とのこるのみ。愛山氏机によりて高談す。昂然として壯語すらく、天下英雄なし。然り眞に英雄なしと。

德富氏と應接間に談じて別る。

歸路の月寒し。車上の秋風己に身にしみて氣しきりに昂る。

されば吾車上に山林の生活を想ひて淸き情風の如く吾が懷に充ちたり。吾豈に人生の外に立たんや。

世は活動す。吾もまた活動す。生活！生活。人間の生活を離れて豈に別に政治、宗教、哲學の題目あらんや。

嗚呼人生！　人生。此の吾は大なる吾なり。

天は我をして種々の經驗を積ましむ。

八月一箇月の柳井村宮本の生活！

昨年十月より今年七月まで佐伯十箇月の生活。

今またパンと水との生活！

---

今朝、天皇を宮城の前面にて其の新征を送り奉りたり。帝者の壯！吾ナポレオンを羨みたり。嗚呼帝王！　帝王！　これを羨むの吾は亦山林の生活を羨む。吾は不思議の心を有す。

---

嗚呼神樣と自然と人類。吾は此の外の警句を知らず。都もひなも貴きも賤しきも吾に等しかれ。クロンウェルは吾に解すべからざるか。ウォースウォルスは吾には解すべからざるか。テニソン トルストイ、吾に解すべからざるか。ルーテル、ダンテは吾に解すべからざるか。直ちに此の人生を解する、これ哲人を解し得る途なり。されど哲人を解し得んか、人生の眞趣も亦自ら是等の明鏡を通じて吾に來らん。

吾は直ちに此の自然と人生を觀、同時に前哲を觀んと欲する也。

十四日。

嗚呼樣々なる哉、人心の歸嚮する點や。



嗚呼樣々なる哉、人間の生活の狀態や。

此の生命生活其のものこれ實に奇異にして神聖なるものにあらざる乎。

紛々として何を推論するぞ。

爾は果して直に其奇異と神聖とを感ずるか。

---

今日金子馬治氏を訪ふ。大に信仰に就て論ず。

哲學者連は決して直感靈信の人に非ざるを知りぬ。彼は書中にありて評批さるゝのみ。

---

午後郊外に散歩す。夜一番町教會祈禱會に出席す。

十五日。

吾哀々として人生を思ふ。

世界觀は哲學者の說明を得て吾其の偉靈に打たる。

されど悠々たる人生を思ふ。茅屋の戀の小女を思ふ。遠島の孤兒の運命を思ふ。夕陽に眠る山村の生活を思ふ。宮本の二少女達を思ふ。嗚呼人生々々。吾は哀の情に堪へず。

生活は義務なるか樂しみなるか。咀なるか。生活々々、人間の生活の眞趣は如何。

「宇宙は不斷の進歩なり」哲學者と詩人とは言ふ。されど人間の生活其のものを痛感する吾には未だ活泉の如き命を有せず。生命其のものこれ神聖に非ずや。吾は神の終極の愛を信じて始めて此の生命を此の不思議の天地に保つを得。

嗚呼吾が靈は神の靈と人の靈とに通ずるを感ず。

十六日。

人は人と天とに對す。

昨日午後の事及び今日の事を記するに先だつて此の感を記しおく

（午後八時三十六分トルストイめをとを讀む時）

何故に人は此の天地の玄妙不思議に對して無感覺なるに立ち至るだらう。

（八時四十五分）庭に出で月を見て、月の前に白雲の自ら浮動するを見て感ずらく、

嗚呼吾は人と自然とは對す。吾は人と自然とに關す。見よ自然を。これ爾の上下左右過去將來を包むものに非ずや。自然は何者ぞ。



昨日午　民友社に至り人見一太郎氏と相談の上愈々明日則ち月曜日より出勤することゝなりぬ。

今日午前教會堂にゆき松村介石氏のわけの解らぬ說教をきかされ、會堂にてパンを喰ふて晝食をすませ、午後は神田なる基督教青年會館にて開かれたる松村氏の講話をきく。事は朝鮮支那に關す。

朝鮮は如何にして改革すべき。此の經倫大策を立てんことを欲す。千萬人を救ふは此の擧なれば也。

此の問題は眞面目なる問題なれば也。

謂へらく、事を實際に處するには左のものを要す。

第一、其の事の歷史を知らざる可からず。

第二、其の事の將來を推測せざる可からず。

第三、其の事の目下の事情に精通せざる可からず。

第四、以て確固たる經倫を立てざる可からず。

第五、剛毅の意志、寬容なる度量、機を致すの敏捷、大膽勇猛を以て實行せざる可からず。

今夜明月に歩して自然を思ひ人生を思ひぬ。
自然を思ふは其の無限、美、大、不思議、力なり。人生を思ふは其の歴史なり、其の變化なり、其のラヴなり、其の罪惡なり、其の悲慘なり。

---

明日より愈々民友社に出席して活動世界に入り布衣の宰相を以て任じて以て「政治」を知らんと欲す。
吾は此の際、山林獨立の生活の自然、神聖なるを感ずるなり。

---

昨日父上より來狀、直ちに返書を出しおきぬ。
今日市山に書狀を出す。
吾は詩人たる可きか、實際家たる可きか。民友社にありても我は眞面目につとめん。吾は到底詩人たるの外能はず。つら〳〵思ふに吾は新世界の豫言者たるべき任を有す。
十七日。
本日始めて國民新聞社に出勤す。



本日、平壌陥りたる報に接す。

---

吾既に新聞社に入る。つゝしみて其職に當るのみ。
己に新聞記者の仲間入りす。將に理想的新聞記者たるべし。

---

されど人生は自然と共に不思議たる也。
己に不思議なり。我は其の驚奇心を加へ來らざる可からず。吾が生其のものこれ不思議に非ずや。
十八日。
本日午前九時半を以て家を出で民友社に出席す。多少の文を草して歸宅す。歸宅の時午後五時半。

---

本日石崎ため氏に一書を出す。
一日又た一日これこそ生活ならめ。偉大ならぬ生活、淺薄なる生活、面白くもなき生活とは之れならめ。
十九日。

自然！ 春咲く花、秋輝る月、夏の夜の星の空、冬の雪の山家の眺め、偉大壯麗なる大洋！ 無限悠久なる蒼空、潺々たる溪流、鬱々たる森林、梢に囀づる小鳥、枯葉を捲く風の音、嗚呼自然！ 吾と爾との間に情ある交を結ばしめよ。

三十日。

昨夜中桐確太郎氏に發書す、氏が父君俄に病みて死したればなり。愛は不死を教ふと申しやる。

河手忠氏に一書を出したり。

今朝少士官の一文を草して國民新聞に載す。

今朝忠治氏を訪ひしにあだかもよし氏の弟なる右次氏、出陣のため暇乞ひに歸宅したるに遇ふ。

晝食を氏の宅にて馳走せられて出社す。

海軍大勝利の報に接しぬ。（民友社樓上）

---

路傍の人、凡て見接する所の人に對して、何故に兄弟！ てふ感情起ざるか。彼の天、星、空、若しくは地上の山川草木に對して、何故に嗚呼吾が大なる自然よとの感情起らざるか。

小我、小我。人は小我の頑迷に陷りたる以上は容易にこれを逸脱し得るものに非ず。若し夫れ天



を指して弘大無邊なる吾が自然を呼び人を見ては吾が兄弟よと言ひ、而して全能の父よと叫び至らば如何に彼は幸なるべき、大なるべき、全かる可き。一生を此く送り得るならば其の事業とか職業とか方法とか凡て何の關はる處なけん。

嗚呼吾常に如何に禱る可き。

曰く、自然に眼を注がしめ給へ。

曰く、凡ての人を兄弟と呼び得るに至らしめ給へ。

二十一日。

茲に青年あり。

其のシンセリティなることに於ては敢て見接する處の人々に劣らずと自信すと雖も、其の學識に至りては自から大に人に劣れるを自覺するに至りたるとせよ。

彼は如何にすべきか。曰く、

飽くまで其のシンセリティを自覺して自信自重せよ。されど精勵困苦して勉勵讀書せよ。

智者は凡ての者を透して事實を見る。

疑問の前には人眞面目となる。不思議の前に人自から嚴かに立つ。然らば、神よ、吾をして常に

眞面目ならしめ給へ。

嗚呼吾は眞面目ならざるを感ずる也。

二十二日。

昨日は社用を以て海軍省に至る。

社用を兼ねて德富氏に書狀を發す。

昨日國元より書狀來り母上負傷せられし由。昨日民友社の發送掛りに富水尾間の兩氏を推擧した

る處、直ちに採用せられて昨夜より執務。

竹越氏より支那論一部をもらう。

嗚呼人間の一生！　森を友として送るも一生！　編輯樓上に送るも一生！　文壇に立つて筆を採

るも一生！

一生！　生れたるものは死す。吾は死す。而して凡てのもの死す。而して天地に生命充つ。

昨夜の雨晴れて今朝、見よ、秋空透徹、灝氣空にみつ。綠色猶美なり。思ふ岩城山麓高叫山に馳

す。

嗚呼父と母、彼等は子を愛するの外に此の生命の希望を有せず。而して若年の少壯は野心の爲に



苦悶す。愛を命となすものは幸ひなる哉。

二十四日。

街頭の雨蕭々と秋冷身に泌みて冬の近きを覺えぬ。

二十二日の夜は當番なりしかば民友社樓上に眠る。電報しば〳〵來りたり。されど遂に號外を出

すにも及ばずして止みぬ。

半夜急然夢さめて頭を擧ぐれば秋の夜半の月漸く昇りて其の青光を塵にまみれたる玻璃窓になげ

おぼろに吾が枕頭を照らしぬ。東京大都の中心、京橋區も今や寂々として聲なく、たゞ隣室の柱

時計の秒聲のみ響く。風窓外の桐葉を鳴らしては止み、止みては鳴らす。

昨日は日曜日、午前九時二十分民友社を出でゝ一番町なる教會堂に出席して植村正久氏の演說を

きく。今日の時勢の意味に就き說く處あり。日本をして再び精神的大潮にむちうたしむるは今日

支那との戰鬪、我が國大勝利の時にあり。日本をして日本の傳道をなさしむるも今日なり云々。

午後牛込より麴町區三番町二十六番地に轉居す。今井忠治氏の隣家なり。

時勢！　歷史！

一十五日。

時勢歴史。

されど吾山林を忘るゝ能はざる也。

二十四歳！　碌々として朽ちなんとす。信仰あるにあらず、學識あるに非ず。嗚呼吾は此の吾は空しく老いんとはする也。

今夜今井氏と共に久しぶりに綾之助の義太夫をきく。美感にみたされたり。

プルタークの英雄傳を讀まんと欲するの念起りぬ。

理想的天眞の美少女を詩歌に詠まんことを希ふ。

戀の深き消息をくみたし。

人生は徹頭徹尾不思議なり。

二十七日。

昨夜は田村氏同道の積りにてアームストン曲馬を見物に出掛けたる處、田村氏不在なりしかば獨り行きぬ。切符は國民新聞社の通用切符なるが故に費用はいらず。

今夜は今井君と共に行きたり。

今朝はアンナカレンナを讀む。



昨日並河半吉氏吾等より別居せんことを申出づ。爲めに吾も彼との交を絶つに至りぬ。

二十八日。

自由！　自由！　吾は自由を欲す。

オヽ天の自由よ、吾に在れ。

吾は天の自由を希ふ。

アルプス高峰の雪の姿。

崑崙山頂の猛鷲の翼。

嗚呼吾は之を希ふ。

秋風そよ〳〵女部花。

あたりに人の影もなし。

ちよ〳〵と囀る森の鳥。

あたりに騒ぐ聲もなし。

嗚呼自然！　自然の自由。

自然の自由は吾が望みなり。

二十九日。

昨日は風邪の上に頭重かりしかば民友社を缺席せり。

昨日並河氏終に去りたり。

昨夜祈禱會に出席せり。

昨夜アンナカレンナを讀みて夜半に至りぬ。

昨日は大に「自然」を考へ、「自由」を懷ひ、終に自由の歌を作りけり。而して又ウォーズウォスルの「チンテルン」精舍の詩を讀みたり。

---

吾自然に對する吾が過古の幸福を懷ふ時、吾が情一種の回想失望的哀感に打たる。されどウォーズウォルスと共に左の句を唱し得ば、幸福ならずや。

---

**That time is past,**
**And all its aching joys aie no more,**
**Anb all its dizzy raptures noz for this**



Faint nor mourn nor murmur, other gifts.
Have followed, for such loss, I would believe.
Abundant recompense. For I heve learned
To look on nature, not as in the hour
of thoughtless yonth; but hearing after times
The still, sad music of humanity,
nor harsh nor grating ,though·of ample power
To chasten and sudden.

---

嗚呼自然！　自然！

吾は爾の崇拜者たらんことを欲す。

爾の大、美、聖！　は眞理なり。吾爾の懷に入らんことを希ふ。爾の自由を吾にめぐめ。

（午後九時五十分）

---

本日は終日雨蕭々たり。風邪尙ほ少しも癒えざるが故に出社せざりき。今夜は殊の外靜寂の夜なり。

今日アンナカレンナを讀み、金槐和歌集（群書類從のうち）を讀みぬ。夜七時より八時まで今井氏を訪ひ語る。

神の信仰、自然の自由、人間の義務、愛、美。

詩人の書は讀まざる可らず。これ靈の聲なれば也。これ靈の經驗なれば也。

## 十月

二日。

午前十時二十分より今此の筆をはじむ。

今日は一昨日昨日の秋雨そぼふりて不快なりし天氣に引きかへて、一天晴れて蒼空すみ渡り、日



うらゝかに輝きて、心身の暢び〳〵する心地する也。

一昨日は日曜日、（九月三十日）午前十時教會堂に集まり、植村正久氏の說教をきゝぬ。說教の題は「祈禱」なり。クリストイエス、ケツセマの祈りを引證して大に祈禱の靈界に重き所以を說きたり。吾甚だ此の說を贊す。正久氏曰く、祈禱なくんば宗教なしと。眞に然り、眞に然り。宗教の意義だに明かにするを得ば、祈禱を拒むべからざるを見る也。

此の日午後田村三治氏來訪せられたり。四時頃民友社より手紙來り出社をうながしぬ。

蓋しこれ、吾を招きたるにあらずして尾間氏にあてたりしもの、されど宛名は吾なりしかば吾も直ちに出社したり。

德富氏歸社して在りたり。

其の夜、社樓に一宿せり。半夜電報來ること頻々、半眠半醒のうちに冷衾を被りて一夜を明かしぬ。

百感胸にみちたり。

昨日は全く社樓に費しぬ。夜編輯會議ありたり。德富氏曰く、本社の運命を此の先十箇月に堵し思ひ切つて金錢を用ひて見んと。

夜やゝ更けて歸宅の途につき、途上百感むねにみちぬ。
昨日人見氏と語りたる時、人見氏の曰く、君海軍の通信者となりて軍艦にのり込まずやと、吾これを諾しぬ。百感胸にみちたり。
「生と死と信仰と運命と事業と」
嗚呼人生の問題は吾が此の際の經驗のうちに解かるべし。
吾何故に軍艦にのり込み、生命の危險を冒してまで、吾が目的ならざる新聞社の用に應ぜざる可からざるか。
また吾何故に生命を自然にまかして安んぜざるか。まかしては如何。
吾が天職とは何ぞや。
何時死するも可なるに非ずや。
山林自然の自由を攫むは吾が權利に非ずや。
一死、如何にして死するも可！
嗚呼吾が心底の不屈なる意地强き主義は、此の世界に不平にして寧ろ吾に死の自由をすゝむるに非ずや。バイロン！　吾が血はわかざるか。ウォーズウオルス！　吾が靈はまた戀ひ慕ふ。



吾が一生何ぞや。
戰爭に死したる軍人は如何、
死！
宇宙は生死に轉々發展す。嗚呼此の宇宙！　嗚呼神の宮！
死はうれしき言葉に非ざる乎。
嗚呼自然！　自然！　如何なる場合にも吾が靈の自由を守れかし。吾如何なる場合にも汝の無限なる蒼空を仰ぎて、爾の無限無窮の呼吸に呼吸せんことを希ふ、つとめん。
神よ、神よ。

---

三日。
昨日水谷氏より手紙來る。これ尤も悲なる文字なり。
今日も昨日も出社してまた陸軍省に出頭しなどしたり。
富と功名！　是實に誘惑なり。吾は日々此の誘惑に出遇ふ。
人は人の奴隷に非ざるか。

獨立自由の吾が一個の吾、何を苦しんで他の譽を求むること饑えたる犬が肉を追ふて走るが如きぞや。

此の自由天來の靈、何を苦しんで窮屈なる日を體裁よき名のもとに其實功名の念に煽られて送らざる可からざるか。

何を苦しんで人の爲めに働かざる可からざるか。

人は自家根本のモチーブなる利達の爲めに、樣々の口實を見出して、何時のまにか自からしらず〳〵獨立自由の靈を束縛し居らざるか。

吾何故に百萬圓がほしきや。

吾何故に德富氏がうらやましきぞ。

吾何故に民友社に追ひ使はるべきか。

人生の悲恨は人が人の奴隷となりて、自から苦しみ、吾が靈を直ちに大自然のうちに大自由の翼を求めざるにあり。

人と人との關係は人を小にす。人を盲となす。

吾は此の生命の持主にして吾とは此の獨立の靈に非ずや。神の前に在りて獨立の星に非ずや。



吾は吾自から靈の道を撰ぶ可きのみ。何を苦しんで、他の人の跡を盲目義望的に追ひ求めざるべからざるか。

自由と義務との外に吾を神の前に辱しめざるものはあらじ。吾が信ずる處は自由と義務。

---

吾は進歩しつゝあるなり。

吾は人生に就て大なる信仰と智識に達せんことを欲す。

今朝山龍堂病院に至り、左肩の痛みに就て診察を受け、藥をもらひて歸る。

今夜義太夫をきく。

人は人の奴隷に非ざるかとは、梅川、忠兵衞の義太夫をきゝて打たれたる感じ也。

嗚呼人間、互に墜落す。然り互に墜落す。互に奴隷たり。互に束縛せられて知らざる也。

---

アンナカレンナ、其の次はウイルヘルム・マイステル、其の次はエキスカールジョン其の次はデヴィインコメディ、其の次はフワウスト、其の次はバーンス。

五日。

昨朝德富猪一郎氏を訪ふ。收二、今井忠治君同道す。

今井君は暫時にして歸りたり。

德富氏收二の爲めに英語英文修學をすゝめられ、月謝及び書籍費を一箇年間支辨すべしと言はれたれば有難しと承諾したり。

午後家庭雜誌の原稿を作りたるため出社せず。

夜雨降る。アンナカレンナを讀みたり。

---

今朝の聖書朗讀會は例の如し。

今朝德富氏再び廣島に向つて出立せらる。新橋まで社より送りたり。

---

平々凡々の時間は送られんとす。

平々凡々の時間とは進歩なきの時なり。

---



人が人に對する關係、人が人と繫がる糸、大觀し來れば不思議なる哉。

迷ふ勿れ、惑ふ勿れ。

不思議は減らず、忘れらる。

---

六日。

昨夜祈禱會に出席す。植村正久氏之を主どる。會するもの十數名。吾祈禱し感話す。感話の題目は「恐怖」に就ての佐伯沖の文に於ける試驗なり。

軍人あり、大尉なり、此の人亦た感話す。

植村氏感話す。曰く祈禱は抽象的なるを危險とす。事實實際の上に祈れ。

今朝の集りは例の如し。

---

吾今（午後十時十五分）編輯樓上に在りて、獨り電燈の下、机に對して默座す。

或は車を馳せて陸軍省に到り、記載禁示の事項を聞きて歸り、或は社を代表して內外通信社の樓上に、各新聞社の代表者等と今度廣島に於て、開かる可き議會に關する電報送達聯合の事に就て

相談する處あり。余は印刷所なる秀英舍と電話にて印刷事務を掛合ふなど、吾今や眞に世務紛々の中に入りぬ。

世務紛々何かあらん。

されど吾山林の自由を想ふ時に於て吾が血は昂る。

嗚呼人はすべからく自由なるべし。何を苦しんで自から流俗に陷ることをなす。よしよし、よしや如何なる場合、如何なる境遇に在りとても、吾決して吾が自由なる靈を忘れざるべし。

---

七日。

死は避くることを務む可きか。何故に！

死の後に於て吾は如何なるべき。

不死の意義は如何。

嗚呼虛榮！　人をして生死の意義朦朧ならしむ。

---

八日。



一昨夜は當直なりしが故に社樓に泊しぬ。

昨日は日曜日、午後は眠る。夜田村三治氏來る、洋服にて來る。曰く中央新聞社に入りたりと、得意の樣なりき。世は彼を呑まんとす。否な、彼は到底世の子なり。

昨夜强震あり。

今朝例の集を開きて感話す。靈の要求なかる可からず。靈は靈の自由、權利、義務を求めざる可からず。

---

されど吾が心切に悲しむなり。吾は信仰薄くして徒らに自ら苦しみつゝある也。

貧苦吾に迫り來りて、信仰は來らず。

人生人生。吾には人生の意義暗し。

---

九日。

今日よ明日よと日は轉じゆくなり。

心安らかなる能はず、思ひ内に亂れて瞬時も止む時なし。

神の信仰は何故に吾に平和を與へざるか。
吾に肉の慾望ありて神の道と眞理とに合する能はず。これ平和を得る能はざる所以か。
吾何故に都會の生活に安んずる能はざるか。
自由なる野の民となる、何の吾を躊躇ぜしむるものぞ。嗚呼吾如何にして此の生命を此の世界に送りて可なる可き。
虛榮を捨てよ。
眞の天の自由を求めよ。
嗚呼何故に人は人に對してかくまでに感じの强きや。
人は人の奴隷なるかな。
實際の吾が今日の如き生活と、理想的山林の生活と、其の調和を吾が大信仰の上に見出すを願ふ。

---

此日國元に書狀を發して移轉の斷行一日も早きを望む由申しやる。
吾が父母山林の人に非ざるは吾に取りて絕大の不幸なり。
吾が父母の家、山林に安んじてあらば、吾如何に心强く感じて世に立ち得べき。



今日出社して電報の飜譯に半日を從事したり。
午前は家をさがしてあるく。
伊庭雄氏より書狀來りたり。

---

十日。
本日三番町より平河町五丁目一番地に轉居す。經濟上の都合なり。
山口行一氏都合ありて吾が仲間を去り、食客となる。
吾等の貧は次第に貧なり。
パンと芋とを食ふのみ、肉一片を食はざる也。
德富氏に書狀を發し、海事通信依托の決行をうながす。
今夜の月の美なる哉。
吾は如何なる境遇にも安んじ能ふに至らんことを期す。山林にも自由存す。されど都會にも自然あり。要は吾果して眞に自然と醇眞の交通をなし、自由の氣を呼吸し、美の信仰にうたれ得るかにあり。

神の信仰は不死の信仰なり。不死の信仰果して吾にありや。否不死の信仰の必然の要求を吾が靈は感じたるか。

生死、大なる事實。

人間と自然との關係、人間と人間との關係、而して人間はまた自然と人間とに關係を聯絡す。此の關係を忘る可からず。

吾は實に今何を求めつゝあるか。

---

十二日。

朝認む。

昨日は弟を伴ひて出社したり。水谷眞熊氏より書狀來る。此の書狀は人生の涙なり。今は今井君の手に貨しぬ。掲載し置かん。

田村三次氏民友社に來り應接所にて語る。

金錢缺乏したる故に栗原氏に願ふて給料の先き拂ひを乞ひぬ。

軍艦に乘り込むことに付き國元より不安の由申し來り辭退をすゝめらる。今朝只今、一書を裁して決心を申しやる。

昨夜は舊曆の九月十三夜と今井氏云ふ。共に散歩して九段に至り義太夫を聞きぬ。人生の事、生死の事、古今英雄の事蹟、ローマ、ギリシヤの古英雄、昔時の文明、千古の人情など思ひつゞけて義太夫をきゝぬ。終りて場を出づれば、明月皎として白晝の如く、秋風夜氣をこめて天外より吹き來る。共に靖國社内より濠の堤を散歩し、人情を談じ、詩を談じ、舊遊を談じ、自然を語り生死を語りて、月光と共に逍遙すること多時、別れて歸路につき、路にそば屋により酒を飲む。自から、何のために飲みしや知らず。

吾元來酒を飲まざるに、計らず飲む。蓋し此の夜の餘りに愉快なりしかば心思はず放漫に及びしならむ。馬鹿の事してけり。

昨日昨夜は宇宙にさざまれたり。

今朝集りを開きたり。

水谷氏に書狀を認めたり。

自然のうちに更生しつゝある也。

（午前認む）

---

吾何故に好みて軍艦に乘り込みて生死の間に突入するか。曰く吾を自然のうちに更生せしめんがためなり。更に言ひ換ゆれば愈々シンセリテイなる自然の兒とならんことのため也。また他の言を以てすれば、吾が靈性をして一段の進歩あらしめんためなり。

今夜は祈禱會。祈禱し感話す。其の言ひし處は吾が永生の希望を此處の乘込に就て更らに深く得んこと也。

新らしき傳道師を見たり。

---

十三日。

吾默禱し得るか。獨り月下、密室に熱涙を以て祈り得るか。祈りたる事幾許かある。

嗚呼吾は自然の兒にあらず、故に信仰ある者に非ず。嗚呼自然吾に遠く神吾に遠し。

---

吾が爲し得ざることはこれを自然の順序にまかさゞる可からず。例へば吾が信仰の薄きが如き、これ實に發達にまかすの外はあらじ。

ウオーズウォルスの心を以て心となして自然に近づくが如きもまた然り。

---

されど爲し得ること、例へば書を讀みて學ぶ事、筆を採りて文を作る事　これ等の事は勉むれば即ち爲し得る事に外ならず。爲し得ざるは勉めざる也。勉めざるは弱きなり。弱き者は死す。其の死は當然なり。

---

明治二十七年十月。

十六日。

西京丸の船中に於て此の筆を採る。

十三日は土曜日、吾收二を伴ひて出社したり。

廣島より電報來り艦隊乘込の都合首尾能く出來たるを報じぬ。直ちに用意に取り掛りて其の夜九時五十分新橋發の列車にて出發す。秋雨蕭々。人見、收二、富永、今井、尾間、かき田氏等見送らる。

着廣したるは十五日午前八時過ぎなりき。直ちに大手町なる福井方に到り、社員諸氏に會す。久保田金僊氏と共に市中を奔走して用意す。

大本營に出頭して、從軍免許證等を得たり。

昨夜金僊君に送られて、宇品港に來り、端舟を儻ひて本船に乘り込みぬ。
今朝士官に就いて、砲の事、過日の戰の結果たる本船破損の跡などの事をきく。
只今入浴したり。
以上はたゞ事實の大要のみ、左につまみがきせん。
端舟に乘じて本船に達するや、已に一小舟船梯の下にありて荷物など運ぶ樣なり。われつゞいて上る。これ時事新報の宮本芳之助氏なりき。
昨夜夜更けて甲板に上り、水夫等と語る。此の會話の如きは陸上にては出來ぬ事なり。

---

十八日。
十六日朝六時過ぎ宇品を發して十七日の朝佐世保に着し、同日午後五時拔錨して大同江に向つて出發す。
只今は仁川沖なる由、或人の語るをきゝぬ。時間は午後一時頃なるべし。明日正午前には大同沖に着すべき都合なる由。
昨夜大に荒れ波高うして船體の傾く事三十度位の由、某氏の語るを聞きぬ。今朝未だ五時に至らぬ頃、甲板の上に出づ。月皎々として中天に在り、東天やゝ白みぬ。波濤漠々四圍たゞ雲と波とのみ。斷雲の走ること矢の如く、星影點々、其の間にきらめく、壯大なる光景なりき。
昨日佐世保に於て通信文を發送し、また收二及德富氏、父上、都會に書狀を發す。
佐世保に上陸したり。
二十日。
夜十時三十六分軍艦千代田の船室に於て筆をとる。
十九日午前十時過ぎ大同江に着したり。
同日薄暮千代田艦に乘り込めり。
士官諸子と共に談じ共に食ふて今日も空しく經過したり。空しく經過したりと云ふよりも未だ嘗て經驗なき時間を送りたるため、今日の一日の日の長き事よ。
昨夜は艦長並びに士官諸氏と共に士官室に於て十二時過ぎまで談話し且つ飲む。吾はのまず。
今日午前少尉諸氏と共に談じ晝に及びたり。
吾は政治上の談を試み、諸子よりは軍艦の事をきゝぬ。昨夜は何故に今日まで海軍を攻擊したるかの詰問に對して、詭辯を揮ひたり。境遇の激變せるため反省の時間少なく、精神的發明なし。

馬鹿になりたる心地す。

二十二日。

午後二時四十二分此の筆をケビン艦長室のテーブルに採る。

今日通信し置きたり。

通信の方法は弟に與ふる書となしぬ。

今朝上陸したり。昨日主計長牛を求め置きたる故受取りにゆきたる也。

---

朝鮮人の住宅を見たるは是がはじめてなり。

朝鮮人の生活を實見したるも始めてなり。

小丘と疎林と、畦道と、海澤と、岩礁と退潮、滿潮と夕陽と、白衣と、野牛とは更らに一段の光景を加ふに似たれども、寧ろ吾をして此の民の生活其のものを憐ましめたり。

彼等は現今己れの國の如何になりつゝあるかを知らざるが如し。人民、政事、戰爭、相關する幾何ぞ。

大同江畔の此の光景は吾をして後年決して忘るゝ能はざる印象を與へたり。



昨夜土官室に於て艦長をはじめとして互に集會雜談し政事談尤も盛んなりき。何故に軍艦製造費をこばみたるかてふ問は切々吾に向つて發せられたり。

生活の變化は人をして自然を忘れしむ、宇宙の不思議を忘れしむ。

人は實に人の奴隷なり。人の人に對する關係を思ふ毎に實に驚嘆に堪へざるものあり。

嗚呼吾をして如何なる境遇に在らしむるも常に根本に着眼せしめよ。

嗚呼常に爾の蒼天を仰げ。

戰爭。流血。軍艦。人生の事實なり。されど宇宙これ爾を包む大事實なるに非ずや。

---

二十四日。

支那地に上陸して見物したり。

---

二十九日。

依然としてバカ島の北隅にたゞよふ。蓋し陸軍の上陸未だ了はらざれば也。

二十四日には陸軍上陸に艦長と共に上陸したり。

陸軍は二十四日の微明、十五六艘の運送船に乗載せられて大同江より來着し、直ちに上陸の手續きに及びて上陸にとりかゝりぬ。

午前八時艦長吾を伴ひて共に見物かたがた上陸したり。此の日晴朗、殆んど小春めきたる天氣なり。皇天常に吾が軍神を祐け給ふに似たり。上陸して民家に至りぬ。土民悉く逃亡して有らず。

戯れに豚一頭、家鴨二羽及び婦人用のつく二足を掠めて歸艦す。これより先き吾が艦の陸戰隊、陸上の模樣を探らんため其の朝の三時半頃本艦を出發して己に上陸し、斥候を放ち哨兵を張りたるなり。水兵五六十名計り。

吾今にして婦人用のくつ一個を特に吾が手もて携へ歸りたるを悔んで止まず。吾何の權ありて此の民の家庭悅樂の一品を掠めたるか。

餘人は兎も角、吾の如き天の民を一視同愛すべき信仰を懷き乍ら出來心のたはむれとは言へ、反省もせずして此の害惡を行ふ。

吾實に後悔して止む能はざる也。

兵陵起伏、耕野茫々、所々高樹あり、高樹の小蔭に民家四五の族をなす。牛、豚、鷄、家鴨、驢馬等、自在に逍遙す。



嗚呼皇天の自由の民！　吾これに一害を加ふ。

後悔の一詩を作らんと欲して詩想成り、文字成らず。

---

二十五日の夜突如として一警報を耳にす。曰く、定遠、鎮遠、靖遠、濟遠、平遠、廣丙の六艦及び水雷艇二艘威海衞を出で東方に向て航したりと。これ偵察艦として兼て威海衞近傍に出沒したる浪速、秋津洲二艦の報告なり。

---

二十六日。

午前五時半上陸地を拔描してバカ島の北方にたゞよふ。本隊及び第一遊擊隊第二遊擊隊なり。

二十七日。

旗艦なる吾が艦に向ひ、海洋島と馬鹿島の間を偵察せよとの命ありたるため出發したり。

此の時一報に接す。曰く昨夜吾が水雷艇大連灣口にて敵のマインボートを捕獲し歸りたりと。マインボートとは水雷伏設用の小蒸氣なり。

海洋島の一灣に入りたる時一漁舟を飛ばして支那人來る。たち魚とビスケットの屑とを交換した

り。

島民の狀を望遠鏡にて望み得たり。

島を去りバカ島の間に來りまた漁舟と交換す。

---

二十八日。

昨日　バカ島の邊にたゞよふに過ぎず。

昨日三輪少尉病を以て退艦し小貫候補生來艦す。

本日も亦已に午後三時、而して艦隊は空しくバカ島のほとりにあり。

一報を耳にす、吾が上陸軍已にピーフー河を占領したりと。

艦隊空しく茲に碇泊するは、陸軍上陸を了へざれば也。

---

悠々として日月經過す。

乾坤吾を包み、吾を被へども、吾自然を忘る。

自然の悠々無窮の不思議を忘るゝの吾は神明を忘る。紛々として到る處に心靈の束縛を受く。



## 十一月

六日。夜八時四十分此の筆を採る。

今、吾が艦は大連灣口を去る遠からざる邊を漫航しつゝあり。これ明朝を待つなり。

十一月に入りて以來、始めて此の筆を採る也。

一、二、三日も空しく過ぎぬ。四五日も亦然り。

五日、昨日は通信文を認むる爲め、一日を暮し盡しけり。

今朝漸くの事に Baka を出發して大連灣攻擊に出掛けたり。

十一月一日は、小主計等と共に島に上陸して、牛、豚、雞、家鴨を求めて歸りぬ。二日は艦長大主計等と小長島に上陸して午前半日を暮しぬ。是等の事は詳記せざる可し。吾が頭腦より脫出し得ざる事なれば也。三日は天長節。

四日は實にぼんやりして暮しぬ。

月漸く美なり。

吾大に自然を忘れ、吾殆んど放逸に流れたり。戰爭に從事し乍ら、吾殆んど無感覺なり。大に自然の壯觀を極め乍ら、吾全くこれに無頓着となり了はりぬ。

吾、自から吾を此の天地に忘れたり。

吾、自から吾を小となせり。

放逸！　これ實に吾の敵なり。吾彼に勝たずんば彼吾を殺す。

嗚呼人心程、不思議なるものはあらじ。吾自から吾を知る能はず、吾自から吾を支配する能はず。人は人の奴隷なり。人は人の顏面をのみ見て、自己の頭上を見ず。

八日。

昨日大連灣を取る。

昨朝吾が艦隊大連灣口まで進む。第四遊擊隊に令ありて攻擊にかゝる。

筑紫以下の三四艦進んで灣口の信號等の立てある山頂に向つて發砲す。五六發にして止みたり。

本隊續いて入る。直ちに千代田に向つてこぎ寄せんと試むる二艘の小舟あり。吾が千代田より之れに向つて小銃を發す。二艘引きかへし去りて止む。

旗艦より四五發を放ちぬ。敵なし。



忽ち獵島より信號あり。前面和尙島に日章旗翻へると。數時間はこれをたしかむる能はざりき。

水雷艇と小蒸氣と往復して漸くの事に其の全く日章旗なるを確め得たり。報じて曰く、吾が陸軍一昨夜（五日の夜）金州廳を攻擊して昨朝これを陷れ、今朝また除家山の砲壘を陷いれ、遂に和尙島の砲壘を奪ひ了はりぬと。萬歲を呼ぶ。

餘りに容易に大連灣の陷りしにはたゞ呆然たるのみ。支那人は吾が國民の敵にあらず。

機械水雷等掃除方のため吾が水雷長司令となり、各艦の小蒸氣を以て昨夕本艦を發したり。

吾が艦隊付水雷艇、來襲を戒めて昨夜より沖なかに漫航し、今再び大連灣に歸る途すがらなり。

十四日。

午後三時四十分此の筆をとる。

今は大連灣內ヴユクトリヤ澳內にあり。

昨はジャンク澳に在りき。十二日。和尙島に上陸して西砲臺を見物したり。

日々夜々、同じ事をくり返すのみ。明日は旅順をさして進擊すべし。何故にわれ、自然を思ひ、人生を思ひ、歷史を思ひ、戰爭を思ひ、生死を思ふ能はざるか。

十九日。

十五日の薄暮、大連灣を拔錨して威海衞に進發したり。

本隊、第一遊擊隊、第二遊擊隊、及び八重山艦なりき。

目的は先づ第一遊擊隊をして威海衞の前を巡航さしめ、港内の敵を誘ひ出し、本隊と第二遊擊隊は他に隱れ居て、敵艦、われの少數をあなどり港内より出づるや、八重山をして直ちにこれを本隊に報ぜしむ。本隊乃ち第二遊擊隊と共に急馳して、第一遊擊隊と合し、再び敵を港内に入らことなからしめ、玆に一大決戰を試みんと云ふにあり。且つ若し、敵にして出で來らざる時は夜、水雷艇を放ちて、直ちに港内を襲はしむるにありとの事なりし。

而して敵艦威海衞に在りし事は佛國軍艦の報告したる處なる由。

敵は威海衞より出でず。

風強くして水雷艇襲擊を試みず。

敵に望樓あり。定めし本隊以下の潛伏せるを知りしならん。

此くの如くにして十六、十七の兩日は過ぎたり。

十七日の薄暮、威海衞の前面に觀兵式を行ひて歸る。觀兵式とは冷評なり。

十八日の朝、大連灣に歸れば、千代丸佐世保より來る。もたらす處何ぞ。曰く、敵艦タークーに



在るの電報佐世保より達したるが故に石炭を積まずして急航し來ると。

馬鹿な！敵艦の太沽に在ることは旗艦已に數日前これを知り居たるなり。而して空しく敵の威海衞に遁げ込みたるに及び觀兵式を行ふ。

馬鹿な！此くの如き冷評は士官室に於て發せられたり。

昨日朝十一時頃より午後一時頃まで旅順の方に砲聲をきゝぬ。

昨日午後二時頃より上陸して牛豚を買ふ。實は半ば奪ふなり。但し彼等は土民にして、吾を疑はず吾が求めに應ぜんか、彼等もまた利する可かりし也。

昨日午前十一時頃通信文を認めて送る。

數日前德富猪一郎氏より來狀あり。其の老婆心はうれしけれども吾何となく卑下せられたる心地す。否な否な、われ實に、人の前に自から卑下したり。

われに此の女々しき根性あり。

宇宙に俯仰して千歲相望むの雄心何處にか生ずるぞ。

昨日聞く。英艦陸兵六千を舟山群島に揚げたりと。

これ舟山列島を占領したる者にあらずや。

衆評英の下心を悪む。英は機敏なり。

舟山列島は上海の沖に在り。

今朝ウォーズウォルスの逍遙遊の最後の編を讀みかけたり。

新朝野新聞にて松蔭の七生說を讀みぬ。

哲人善士は必ず其の信仰を有す。

凡て宇宙觀と人生觀を有たぬ者程其の見識の卑しきは非ずとは、軍人と交はりて感ずる處なり。

ボンヤリして居てもすむじやないか。

到底わからんからよす。

ひまがない。

是等の言語はわれ、人間確信する處の宇宙人生觀無かる可からざるを說くの際、往々憐む可き人々より聞く處の言葉なり。

二十日。

神よ、希くは吾々に活ける信仰を與へ給へ。

吾に信仰なきが故に吾は弱し。否、吾弱きが故に信仰薄きか。



吾は狂氣せんとする也。

艦内の人々、吾を輕視するの傾を生じたり。

吾自から輕卒なれば也。謹重の人、自づから他の尊重する處となる。

吾氣を以て人を凌ぐが故に、遂に謹重をかくに至る。他の人に對する道も亦難し。

吾は何となく此の人の世をうとましくなれり。

吾は親友と知己との外の世の俗の人に交際するの道は知らざる者なり。

余りに自尊にして他を下視すれば也。

淡泊、洒落なる能はざるは吾の特質なり。濃厚多情の感は交際の禁物なるが故に吾は交際の上手者に非ず。

人の世に處するもまた難き哉。

誠心實意、必ずしも交際の則に非ず。世は輕薄なればなり。

吾はたゞ吾が天職を奉ぜんことを期す。然るに吾に信仰薄し。吾は自暴自棄せんと欲する也。

狂氣せんとする也。

自殺を思はざるに非ず、未だ決心うすし。

一死萬事休するに非ずや。
戰爭も兒戲に非ずして何ぞ。
自然の自由を希ふ。死はこれを與ふる者か。
嗚呼人の此の宇宙に呼吸する道も亦難い哉。
吾！此の宇宙にたつ。
吾を信ぜよ。
吾茲に在り。一生一死神の則なり。吾自から重ず。

---

## 七生說

天之茫々、有一理存焉。父子祖孫之綿々、有一氣屬焉。人之生也、資斯理以爲心、稟斯氣以爲體。體私也、心公也。役私殉公者、爲大人。役公殉私者、爲小人。故小人者、體滅氣竭、則腐爛潰敗、不可復收矣。君子者、心與理通。體滅氣竭、而理獨亙古今窮天壤、未嘗暫歇也』余聞贈正三位楠河內公之死、世謂顧其弟正季曰、死而何爲、曰、願七生人間、以滅國賊。公欣然曰、是先復吾心。繩刺而逝。噫是有深見于理氣之際也歟。當此時、正行正朝諸子、則理氣並屬者也。新田菊地諸族、



氣離而理通者也。由是言之、楠兄弟不徒七生、初未嘗死也。自是其後忠孝節義之人、無不觀乎楠公而興起者焉。則楠公之後復生楠公者、固不可計數也。何獨七而已哉。
余嘗東遊、三經湊川、拜楠公墓。而輒涕淚、不能禁。及觀其碑陰、勤用徵士朱生之文、則復下淚。噫余於楠公、非有骨肉父子之恩、非有師友交遊之親。不自知其淚之所由也。至朱生、則海外之人、而反悲楠公。而吾亦悲朱生。最無謂也。退而得理氣之說、乃知楠公朱生及余不肖皆資斯理以爲心。則氣雖不屬、而心則通矣。是淚之所以不禁也。余不肖存聖賢之心、立忠孝之志、以張國威滅海賊、妄爲己任。一跌再跌、爲不忠不孝之人。無復面目見世人。然斯心已與楠公諸人同斯理。安得隨氣體而腐爛潰敗哉。必也使後之人、亦觀乎余而興起至于七生、而後爲可耳矣。噫是在我也、作七生說。是文足觀其忠節僕輩讀之壯快正襟。

丙辰八月十七日
義卿足下

中狂王民拜閱

## 十二月

一日。午後八時十五分此の筆を採る。

十一月は筆とりたること僅かに五たび、則ち六日に一度筆採りたる割合となる。吾もまたなまけたる哉。

十二月とはなりぬ、二十七年も已に逝かんとはするなり。

碌々たること依然たり。幾度自から反省するも人間は薄志弱行なる哉。されどこれは已に無益の繰り言たるを免ぬかれざるなり。

吾は碌々を以て此の生を終らんことを欲せず。また決して終らざるなり。

旅順口は二十一日に陥りたり。二十四日か五日に一寸と上陸して饅頭山砲臺附近を見物したり。初めて支那人の死體を見たり。いま尚ほありゝと眼底に印象せられ居るなり。

「戰死者」の實見は、吾をして「戰」なる文字の眞面目なる消息を直感せしめたり。

二十六日の午後までは旅順口の港外に碇泊してありしが、風生じ波高まりしかば、避けて大連灣に歸りぬ。今日まで尚ほ大連灣に在り。

二十七日は初めて雪ふり、艦上顧みれば大連灣内雪紛々、サンプトンス峰頭已に白し。二十八日も少しく降る。

沍寒の時節とはなりぬ。



二十八日の夜、伴武雄、富永德磨の兩友より書狀を得たり。伴氏の書狀は幾度か吾をして涙あらしめたり。

「此の故に僕、皮下注射の療治法ありながら之を施すの資なき匪運を悲まず。同窓の諸子連りに氣焔を吐くをも羨まず」云々の句は却て吾をして此の青年の匪運不幸を泣かしめたり。

また、「如今日中は天暖かく人收穫に忙わし。尤も田家の趣味ある時なるべし。紅葉、濃淡林邱を點綴し、叢菊糾紛流れを擁するあり」の句は吾をして魂天涯の山林に飛ばしめ、うたゝ自然の自由にあくがれしめたり。

嗚呼自然！　自然！　吾に親しかれ。吾、爾と友たらんことを希ふ。

友！これ言葉に非ず、空言に非ず、形容違非ず。嗚呼「友よ」爾を呼ぶを得ば如何に吾は幸福なるべき、高尚なる可き。偉大なる哉。

不思議なる人類の歴史！不思議なる個人の生命！。

不思議なる人類の歴史！不思議なる個人の生命！。

嗚呼吾が思は千々に走りめぐるなり。

クリストの時代と、生涯と、行爲と、運命とを思ひ、羅馬を思ふ時は、其の古跡を想像し、カー——

ライルを思ひ、ウオーズウオルスを思ひ、バーンスを思へば其の時「吾が心は丘上に在り」の詩を思ふ。

過ぎし少年の時代を思へば夢の如し。岩國の生活は如何、今道小學校の生活は如何、龜山、山下の生活は如何。

佐伯の生活は吾をして自然に近づかしめたり。中の谷を思ひ、元越山を思ひ、尺間山を思ひ、銚子の瀧を思ひ、黑澤の櫻を思ひ、蓉匠の月を思はしむ。麻鄕村の生活を思ふ。雪夜の靜寂を思ひ、高塔山の夕陽を思ふ。舊友今如何、古川駒造何處にかある。

嗚呼過去！　時！　不思議なる哉、過去とは何の事ぞ。

過去とは空乎。

四日。

宗教は愚民の信ずる者たりと放言し、肉情の外、更らに高尙なる感念なき一個の海軍大尉は、何の權ありて、天に屬せんことを熱望し、自然の眞兒たらむことを熱望し、自由ズキたらんことを熱望する一個の青年を罵り得る乎。

高上なる聖者は吾を此の衆俗のうちに見捨つるか。



カーライル、ウオーズウオルス、諸君は此の目に見ゆる世界には何の權をも有せざるか。

天は吾をして人間の弱點を自覺せしめ給ふが如し。人間の弱點は何處に在りや、其の最大なる弱點は如何。

天地人生に就て眞面目なる感情を常に絕ゆることなく保持する能はざることなり。

一言以てこれを斷ずればシンセリテイならぬことなり。

更に言ひ換ふれば、生命其のものゝ不思議なることを感ぜざるに在り。

一方よりこれを言へば、

日常周圍の肉情的慣習に感染せられたる也。然らば一個彼の海軍大尉と吾との差は如何。曰く。

吾も大尉も此の弱點を有す。たゞ大尉は未だ此の弱點を少しも自覺する能はずして得々たり。吾は深く之を自覺して脫出するに熱心なるものなり。則ち己に此の弱點を自覺する者なるが故に、天地人生に就て已に多少感得し確信する處を有するものなり。大尉に於ては全く然らざるのみ。故にわれ彼の罵言を恥とせず、却てかれの無明を憐憫せざる可からず。兎も角も此の弱點こそ最初最大の弱點に非ずや。

嗚呼吾！たゞ聖賢哲人を慕ふ。

故に如何なる權勢ある人にも一寸一分たりとも避退すべき事ある可らず。
昂然として獨立獨行す。
社交的得意は人をして其の靈性的失意に陷らしむる者たることを忘る可からざる也。
今日將に沈まんとする初月を甲板より望みて、歸室此の語を認む。

十日。

夜更けて人眠れり。北風激しく、灣内浪高く、風寒し。夜沈々、天上月皓々、地理學考の日本部を讀み終はりぬ。
嗚呼此の大自然、此の人類、此の歴史。
不思議にして眞面目なるは人生なる哉。
地理學考は收二より送りし書、五日これを落手せり。これ地理的哲學なり。若しくは宗教詩歌的地理なり。或は豫言的地理學なり。

十二日。

吾が目下の戰は、われを誘ふて止まざる周圍のアイドルなり。カーライル曰く、此の世界に於てアイドルこそ最大の怪物なれと。吾は此の怪物の怪力に破られつゝあるなり。苦戰しつゝあるな



り。
日々夜々、空々然として逝くなり。
朝起くる時八時、夜眠る時十二時、或は十時、若しくは一時。昏々としてアイドルの支配の下に在り。
觀察する處、何物ぞ。曰く、なし。
大連灣！吾には見慣れたり。
停春氏の近松門左衛門を讀みつゝあり。

二十一日。

今年ものこり少なくなりぬ。
艦隊は大連灣に在り。威海衛攻擊を待つあるのみ。
伴武雄氏、引頭百太氏、河村正雄氏、今井忠治氏等の書狀來り、返書を認めたり。
河村正雄氏は山口中學校同窓の舊友、一別以來已に七八年なり。吾が國民新聞紙上の通信に依りて吾を知り、則ち書狀を送りしなり。
引頭百太氏は朝鮮に在り。

伴武雄氏の書狀は最も吾が情を動かす也。左の俳句を書添へて送りぬ。

我が宅傍に於て、

水宅を谷ほのぐらく紅葉ちる

我が宅にて、

しぐるゝや破れ障子の山つゞき

こがらしの我が影を吹く障子哉

碁の音にまぎれても聞く落葉哉

麻里布浦にて

潮みちて漁村影あり夕紅葉

和歌即吟、

みるまゝに鹽やく煙りなびきけり

沖のしぐれを誘ふ浦風

馬島にて、

島蔭や時雨れて落ちし三日の月



是等の俳句、和歌の善惡は吾知れずと雖も、兎も角もこれ皆吾が熟知せる林丘濱海の間に成りしもの故、吾をして哀吟幽懷惜く能はざらしめたり。

十九日に一度、和尙島の下に上陸し、今日また上陸す。

見聞する處少なからず。

二十二日。

今日午前ウォーズウォルスのエキスカージョン最終の卷の讀みかけを讀みたり。多感多涙、憤恨痛悔惜く能はざりき。

通信文を認めたり。

山口中學校の舊友に出遇ひぬ。即ち浪速の小主計××なり。

小說「紫」を讀みたり。

船長より千代田一寸と歸國の事をきゝぬ。但し未定の由。一昨夜と記憶す、小說用達會社を讀みたり。これホウソーンの作を思軒居士の譯したるもの也。

欺かざるの記を書き始めて以來實に多くの事を感じたり。多くのストラックルを經たり。而して吾が信仰と智識は依然たる也。進歩進歩と稱す。進歩何處にかあるぞ。寧ろ退歩には非ざるか。